史　跡

上之国勝山館跡　Ⅱ

――昭和55年度発掘調査整備事業概報――

蓬来鏡

1981・3

上ノ国町教育委員会

史　跡

上之国勝山館跡　Ⅱ

――昭和55年度発掘調査整備事業概報――

序

史跡上之国勝山館跡環境整備事業は昭和54年度を初年度とし、本年第２年次を迎えたところであります。

55年度発掘調査の結果、館主体部から建物跡と思われる掘立柱跡等が多数検出され、本館が長期に亘って使用されていることがわかりました。

又出土品も、金属製品、木製品、骨角器類等、多岐にわたっていますが、殊に出土した陶磁器については斯界の権威者、東京大学名誉教授三上次男博士、佐々木達夫金沢大学助教授の両先生に御教示を戴いたところ、中国より輸入された高級品がその過半を占めるとの御指摘を受けました。北辺の館跡にかくも多量の中国製磁器がもたらされていることに、両先生は強い関心を示され、今後はその背景について究明すべきであるとの御指導を賜るところとなりました。

本館より中国製青磁、白磁が散見されることは述べられていたところではありますが(続上ノ国村史昭和37年)、両先生からその重要性について御指摘を受け、愈々もって本館の重要さを深く認識するところであります。

事業の遂行にあたり、文化庁、北海道教育委員会をはじめ別記の諸機関、諸先生から多大の御指導と御高配を賜わり、衷心より感謝申しあげるところであります。

56年度よりは壕跡地区の整備に着手の予定であり、又今後館後方部、夷王山墳墓群の範囲確認調査を実施し本館跡との関連性を解明することが計画されております。

当委員会においては上記の諸事項や、今後予想される種々の事を考慮しながら、一層の努力を致す所存でありますが、関係機関、諸先生の増々の御指導をお願い申し上げ、もって事業の円滑な遂行を期すものであります。

本書は55年度事業の概要をまとめたものでありますが、斯界の諸先生に御利用いただけるところがあれば幸甚であります。

昭和56年３月

北海道桧山郡上ノ国町教育委員会

教育長　青　柳　　隆

本文目次

増刷にあたって…… 3
例言／参考文献…… 5

I　発掘調査
　1　調査の方法…… 7
　2　層序…… 7

II　遺構
　1　壕跡…… 8
　2　建物跡……11
　3　竪穴遺構……12
　4　溝遺構……15
　5　集石……16

III　遺物
　1　陶磁器……16
　2　鉄製品……19
　3　銅製品……30
　4　石製品……31
　5　古銭……31
　6　骨角製品……31
　7　その他……32
　　（木製品，漆器，自然遺物）

おわりに……32
古銭一覧表……40

挿図目次

第１図　グリッド配置図…… 6
第２図　壕跡セクション図…… 9
第３図　竪穴実測図（P2，P4，P10）……13
第４図　1.建築材出土状況　2.集石状況……15
第５図　舶載陶磁器（白磁）……20
第６図　舶載陶磁器（染付）……21
第７図　舶載陶磁器（染付）……22
第８図　舶載陶磁器（染付・青磁）……23
第９図　舶載陶磁器（青磁）……24
第10図　舶載陶磁器と国産陶磁器（天目・唐津）25
第11図　国産陶磁器（美濃・瀬戸）……26
第12図　国産陶磁器（美濃・瀬戸）……27
第13図　国産陶磁器（摺鉢・壺）……28
第14図　国産陶磁器「摺鉢・沈子）……29
第15図　鉄製品……33
第16図　鉄製品，木製品，銅製品……34
第17図　銅製品……35
第18図　石製品……36
第19図　古銭……37
第20図　古銭，骨角製品……38
第21図　骨角製品……39

附図−1　壕跡実測図
附図−2　建物跡・竪穴遺構実測図（1，2）

例　　言

1. 本書は、史跡上ノ国勝山館跡の昭和55年度発掘調査及び環境整備事業について概要をまとめたものである。
2. 本年度の発掘調査は、次の体制でのぞんだ。
   調査主体者　上ノ国町教育委員会
   教育長 青柳 隆
   発掘調査担当　松崎水穂
   調査スタッフ　藤田 登、斉藤邦典、中村公宣
   事務担当　佐藤正雄、笹田 昇、山崎洋子
3. 本書の作成は、藤田、斉藤、中村があたり、それぞれが項目別に分担し、各文末に文責を記した。
4. 挿図作成は、上記の他に小林、松原、草間、沢村、笹浪、坂本、小滝が行った。
5. 遺物の写真撮影は、藤田が行った。
6. 挿図の中で示した北方位は、磁北を示すものである。
7. 挿図の中で、竪穴遺構をP、鉄製品をM、木材をW、石をSで示した。
8. 挿図の縮尺は、遺物に4分の1、3分の1、2分の1、5分の2、3分の2を用いているが、他は不同である。
9. 調査にあたっては、次の関係各位に多大なる御協力と御指導を賜った。
   土地所有者　米澤光一、草間サユ、草間恒二、草間誠一、松前神社、倉内作太郎、布施潤一郎、上ノ国八幡宮、奥野良広、中村広
   奈良国立文化財研究所　沢田正昭
   ㈶元興寺文化財研究所　内田俊秀
   平安博物館　岩本義雄講師
   金沢大学助教授　佐々木達夫
   群馬大学教授　新井房夫
   群馬県埋蔵文化財調査事業団
   石守晃、谷藤保彦、桜岡正信
   文化庁記念物課　仲野浩、牛川喜幸、高瀬要一、服部英雄、河原純之、西弘海
   同 建造物課　仲沢知士
   東京大学名誉教授三上次男
   東洋文庫　渡辺兼庸
   東京都立大学助教授町田洋
   東京国立文化財研究所　江本義理
   東北歴史資料館　藤沼邦彦
   八戸市教育委員会　工藤竹久、佐々木浩一、金津匡伸
   弘前市教育委員会　今井二三夫
   弘前大学教育学部教授村越潔
   浪岡町教育委員会　工藤清泰
   青森県立郷土館　鈴木克彦
   青森県埋蔵文化財センター
   三浦圭介
   青森県教育委員会　成田誠治
   北海道教育委員会文化課
   藤本英夫、竹田輝雄、高橋和樹、宮塚義人
   北海道埋蔵文化財センター
   大沼忠春
   北海道大学
   文学部助教授　林　謙作
   講　師横山英介、西本豊弘
   北海道大学工学部教授足立富士夫
   札幌大学教授石附喜三男
   江別市教育委員会　高橋正勝、直井孝一
   枝幸町教育委員会　佐藤隆広
   松前町教育委員会　永田富智、久保泰、井上真理子、工藤ゆかり
   七飯町教育委員会　石本省三
   乙部町教育委員会　森広樹
   江差町教育委員会　宮下正司、藤島一己、高原孝
   函館市　鈴木正語
   又、多数の地元作業員による御協力を得た。

参　考　文　献

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡Ⅵ(概報)　1973　福井県教育委員会　朝倉氏遺跡調査研究所
函館志海苔古銭　1973　市立函館博物館
青戸葛西城址調査報告Ⅱ　1974　葛西城址調査会
遠矢第2チャシ跡遺跡調査報告書　1975　北海道教育委員会
青戸葛西城址Ⅱ区調査報告　1976　葛西城址調査会
尻八館第2次調査（概要）調査研究年報 第4号　青森県立郷土館
草戸千軒町遺跡　1976　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　広島県文化財協会
史跡根城跡発掘調査報告Ⅰ　1978　青森県八戸市教育委員会
浪岡城跡Ⅱ　1978　浪岡町教育委員会
史跡根城跡発掘調査報告書Ⅱ(概要)　1979　青森県八戸市教育委員会
瀬田内チャシ跡遺跡発掘調査報告書　1980　瀬棚町教育委員会
日本の建築(2)　古代Ⅱ、中世Ⅰ
物質文化30
陶説第二一四号
陶磁大系6・7・10・11・13・19・36・37・38・42・43
世界陶磁全集4・5・14
日本陶磁全集7・9・17
鏡と剱と玉　1939
日本の美術4(甲冑)
日本の美術9(刀装具)
日本の美術10(刀剣)
日本の美術13工芸(刀剣武具)
古錢大鑑　1926
日本の古銭　1927
アイヌの民具　1978
文化財用語辞典
新訂陶磁用語辞典
最新歴史年表

2
3
4
5
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
M
L
K
J
I
H
G
F
0
100m

第1図　グリッド配置図

Ⅰ　発掘調査

1．調査方法（第１図）

発掘区は壕跡及び館中央平坦部建物跡とした。グリッドはまず20m ×20m の大グリッドを指定地境界杭２番と17番を結ぶラインを基準線として順次設定していった。それぞれ大グリッドは南東より北西へＡ，Ｂ，Ｃ……北東より南西へ１，２，３……とした。呼称は１Ａ区，１Ｂ区……となる。さらにそれを４ｍ×４ｍを１単位とする25の小グリッドに細分し、左上より右下へ１～25区とした。調査は小グリッド単位で行なったため、その呼称は１Ａ１区……１Ａ25区となり、遺物も小グリッドごとに層位を附して取り上げた。壕跡については昨年小部分の検出であった箱薬研堀の方向、規模、さらに薬研堀の寺の沢付近までの調査、及び既発掘区に隣接する南側台地一帯とした。建物跡については４ｍ幅のトレンチ方式とし、順次必要に応じて拡張していった。発掘面積は壕跡、605㎡、建物跡 804 ㎡、計1409㎡である。（第１図）

（斉藤邦典）

2．層序（第２図）

本項で述べる層序は壕跡部において観察したものである。54年度の概報で述べている層序と同区域のものだが、本調査で新たな堆積層が確認されたので昨年度との対比を行ない分類をした。

まず今回新しく加えられた土堤部下に堆積する白色火山灰以前の堆積層（明褐色土）と魚貝層を入れて大まかな分類をすると次の様になる。

Ⅰ層　表土（耕作土、腐植土、その他混合土）
Ⅱ層　暗褐色土（低地面ではこの下面に白色火山灰が堆積する）
Ⅲ層　ａ．明褐色土
　　ｂ．魚貝層
　　ｃ．空壕廃土
Ⅳ層　黒色粘質土
Ⅴ層　褐色土（縄文期の包含層）
Ⅵ層　基盤（淡緑色凝灰岩質）

以下に土質や色調より細分してみた。尚各層の細分された層は堆積順に１，２，３とした。また白色火山灰については調査中に現場に来ていただいた群馬大新井房夫氏、東京都立大町田洋氏の両教授により渡島大島火山灰（1741年）であることが確認された。

Ⅰ層……表土。
Ⅰａ層……暗褐色土～明褐色土。粒状を呈する。土手構築の際、他より運ばれた盛り上げ土である。５層に細分される。
Ⅰａ１層…暗褐色土。粒状　やわらかい。
Ⅰａ２層…褐色土。白色火山灰がブロック状に混入。粒状　非常にやわらかい。
Ⅰａ３層…暗褐色土。粒状　堅くしまっている。Ⅰａ１層に比し暗い。
Ⅰａ４層…明褐色土。パミスまじり　堅くしまっている。
Ⅰａ５層…黒褐色土。粒状。
Ⅱ層……プライマリーな層である。暗褐色土。若干粘性あり。やわらかい。
Ⅲａ層……明褐色土。人工的な堆積土である。７層に細分される。
Ⅲａ１層…明褐色土。粒状　パミス粒多量　ボソボソである。
Ⅲａ２層…明褐色土。堅くしまっている。パミス粒少ない。黄色粘土粒含有。
Ⅲａ３層…明褐色土。粘性ややあり。パミス粒少ない。堅くしまっている。
Ⅲａ４層…暗灰褐色土。粘性ややあり。パミス粒少ない。
Ⅲａ５層…明褐色土。粘性強い。黄色粘土粒含有　堅くしまっている。
Ⅲａ６層…明褐色土。やわらかく粘性なし。パミス粒多量で粒子が大きい。
Ⅲａ７層…黒褐色土。粘性ややあり。
Ⅲａ′層……褐色土。Ⅲａ層にⅡ層が混入し形成される。Ⅲａ層に比し色調が暗い。６層に細分される。
Ⅲａ′１層…褐色土。粘性強い。細かいパミス粒含有　堅くしまっている。
Ⅲａ′２層…褐色土。パミス粒やや大きい。やわらかい。
Ⅲａ′３層…褐色土。細かいパミス粒含有　やや堅い。

Ⅲ a′4 層…暗褐色砂質土。細かいパミス粒が多量に含まれる。ボソボソ。
Ⅲ a′5 層…褐色土。Ⅲ a′2 層に類似するがパミス量多い。
Ⅲ a′6 層…褐色土。Ⅲ a′3 層に類似するがパミス量やや少ない。
Ⅲ b 層……混土魚貝層。魚骨、貝類、炭化物、焼土、白灰等含有される。
Ⅲ b 1 層…褐色土。粒状　やわらかい　焼土、炭化物、魚骨、貝含有。
Ⅲ b 2 層…暗褐色土。粒状　やわらかい　焼土、炭化物、魚骨、貝含有。
Ⅲ b 3 層…明褐色土。粒状　しまりあり。焼土、炭化物、魚骨、白灰含有。
Ⅲ b 4 層…黒褐色土。粒状　焼土、炭化物含有。
Ⅲ b4′ 層…黒色土。粒状。
Ⅲ b 5 層…黒色粘質土。炭化物含有　黄褐色土混入。
Ⅲ b 6 層…黄褐色土。炭化物含有　破礫混入。
Ⅲ b′ 層……黄褐色砂礫土～黒褐色土。ＳＰＣ～Ｃ′間を走る空壕Ｃ覆土で、以下４層に細分される。
Ⅲ b′1 層…黄褐色礫層。
Ⅲ b′2 層…褐色土。粒状　砂礫粒混入　魚骨、貝含有。
Ⅲ b′3 層…暗褐色土。魚骨、貝含有。
Ⅲ b′4 層…黒褐色土。粒状　砂礫粒混入。
Ⅲ c 層……空壕Ａ，Ｂ，Ｃ廃土。黄褐色砂礫土。
Ⅲ c 1 層…黄褐色砂礫土。黄色粘土粒が多く含有し砂礫粒も大きく多い。やわらかい。
Ⅲ c 2 層…黄褐色砂質土。砂礫粒はⅢ c 1 層に比し若干少なく小さい。
Ⅲ c 3 層…黄褐色砂質土。黄色粘土粒が多く含有し粘性強い。砂礫粒少ない。
Ⅲ c 4 層…黄褐色砂質土。黄色粘土粒少なく砂礫が多く含有する。ボロボロ。
Ⅲ c 5 層…黄褐色砂礫土。砂礫粒は大きく多い。
Ⅲ c 6 層…明褐色砂質土。砂礫粒は小さく多い。サラサラしている。
Ⅲ c′ 層……Ⅲ c 層に比し色調が暗い。Ⅲ c 層に暗褐色土が含有する。暗褐色砂礫土。ＳＰＢ～ＳＰＢ′間で観察される空壕Ｃ覆土で、以下４層に細分される。
Ⅲ c′1 層…暗褐色土。黒色土微量混入　粘性強い。砂礫粒微量混入。
Ⅲ c′2 層…黄褐色砂質土。粘土粒若干混入、砂礫粒小さく少ない。ややボソボソ。
Ⅲ c′3 層…黄褐色砂質土。Ⅲ c′2 層より粘土粒が多く粘性を帯びる。砂礫粒は小さく少ないが、大礫も混入する。
Ⅲ c′4 層…暗褐色砂質土。粘土粒と粒状の暗褐色土がまばらに混入。極めてボソボソ。
Ⅳ層……黒色粘質土。炭化物含有。
Ⅴ層……縄文期の包含層である。
Ⅴ 1 層…茶褐色土。粒状。
Ⅴ 1′ 層…暗褐色土。Ⅴ 2 層に比しやや暗い。
Ⅴ 2 層…褐色土。若干粘性あり。
Ⅵ層……淡緑色凝灰岩質基盤。　（斉藤邦典）

Ⅱ　遺構

１．壕跡（附図-1）

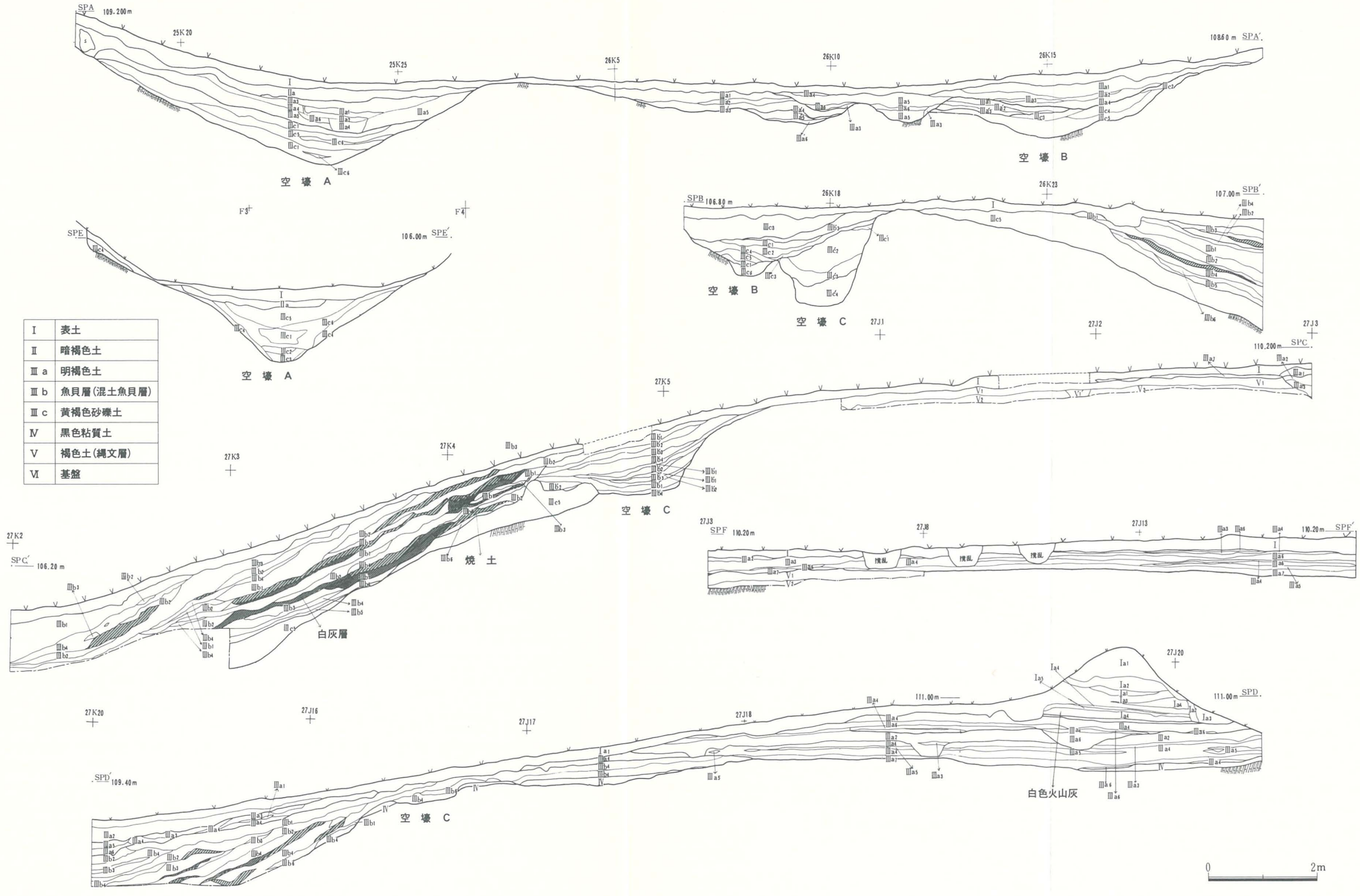
昨年度調査の主体を占めた薬研堀を空壕Ａ、さらにそれに平行する薬研堀を空壕Ｂ、箱薬研堀を空壕Ｃとした。

空壕Ａについて

昨年に引き続き調査を行ない寺の沢付近まで拡張した。その結果、段差を有する深さ１ｍ程の溝が確認された。またＳＰＡ～ＳＰＡ′間において空壕Ｂ及びその中間に位置する浅い溝との新旧関係について検討した結果、空壕Ｂとは覆土がほぼ同じであることが判明した。また浅い溝は、当初空壕Ａとセットになるのではないかと思われたが、Ⅲ c 層上面に堆積しているⅢ a′層よりの掘りこみであり、空壕Ａ及び空壕Ｂよりも新しいと思われる。覆土はⅢ a 層である。しかしながら隣接する土堤の横断面ではⅢ a 層が白色火山灰降下以前に堆積していることにより、この浅い溝は、白色火山灰降下以前のものであることが判明した。尚浅い溝の掘りこみ面Ⅲ a′層は空壕Ａ覆土にはない。

空壕Ｂについて

最大幅５ｍ、深さ1.2ｍ、発掘区南東端より北西へ走り空壕Ｃと重複してしまう。ＳＰＢ～ＳＰＢ′間において空壕Ｂと空壕Ｃの切り合い関係が観察されるが、これにより空壕Ｃが自然埋没後空壕



Ⅰ	表土
Ⅱ	暗褐色土
Ⅲa	明褐色土
Ⅲb	魚貝層(混土魚貝層)
Ⅲc	黄褐色砂礫土
Ⅳ	黒色粘質土
Ⅴ	褐色土(縄文層)
Ⅵ	基盤

第2図　壕跡セクション図

Ｂが構築されたことが判明した。

空壕Ｃについて

ほぼ南より北へ走る。規模は長さ約60m、幅1.8ｍ、深さ1.8ｍ程である。壕は発掘区北端、人工的と思われる比高差５ｍをもつ崖状の大規模な掘りこみへつながる。ＳＰＣ～ＳＰＣ'間においては空壕Ｃの覆土がＳＰＢ～ＳＰＢ'間の空壕Ｃの覆土とは異なりⅢｂ層とⅢｃ層の混合土からなるⅢｂ'層である。またＳＰＣ～ＳＰＣ'間の空壕Ｃの旧沢側の立ち上がりは急傾斜のため、壕廃土を盛り上げることにより構成されている。

旧土堤を形成するⅢａ層の堆積について

発掘区において北東端25Ｋ20区より南西端27Ｋ20区へ約40m、土堤より北西へ約12mの幅をもち、土堤に並走するように堆積する。尚本層は北東より南西へかけてはほぼ平坦面を形成するが、北西より南東にかけては27Ｋ１区付近より旧地形が急傾斜のためやや緩斜面となる。

土堤下部Ⅲａ層中Ⅲａ２層を掘りこみ面とする幅１ｍ、深さ40cmのややなだらかな立ち上がりをもつ落ちこみがある。尚現在の土堤は白色火山灰降灰後のものである。またＳＰＤ～ＳＰＤ'間においてⅢａ層は魚貝層上面に堆積しており、魚貝層よりも新しいことが判明した。

魚貝層について（Ⅲｂ層）

発掘区内において26Ｋ23区付近より南西端27Ｋ20区にかけて約20m、南東部27Ｋ１区付近より北西部27Ｋ４区にかけて約12mの幅で堆積する。含有物は焼土、白灰、炭化物、魚骨、貝類と多岐にわたる。尚27Ｋ２区魚貝層下部より多量の木材(平材その他）が検出された。またＳＰＢ～ＳＰＢ'間の26Ｋ23区付近では空壕Ｂ覆土の上に堆積している。

黄褐色砂礫土について（Ⅲｃ層）

この土は、西端寺の沢へつながると思われる深さ４ｍ以上の旧沢地へ多量に堆積しており、各空壕の構築時に生じる廃土である。また各空壕の覆土にもみられる。さらにＳＰＣ～ＳＰＣ'間における空壕Ｃの谷側の立ち上がりはこの土を盛りあげることにより構成されている。　　（斉藤邦典）

２．建物跡（附図-2-1）

本調査で検出された建物跡は、壕跡の北側約60ｍ離れた広域な舌状の台地に位置する。この台地は、最大長約140ｍ、最大幅約110ｍでほぼ南北に広がっている。その中で北側へ緩い傾斜を示す地山を整形して数段の平坦部を形成している。尚、この台地は旧畑地（一部では現在も畑地として使用している）で、畑地造成時の整形によって生じた段も数ヶ所あるが、発掘後の状況においては、そのほとんどが消滅してしまう。

本調査では、４ｍ幅のトレンチ掘り方式で行ない、建物跡の分布範囲を確認することにした。その結果発掘区のほぼ全面に無数の柱穴をはじめ、竪穴遺構、溝遺構等が検出された。このことから、各遺構は台地に有する全ての平坦部に広域にわたり分布していることが考えられる。

よって今回は、17Ｌ・Ｋ区、18Ｌ・Ｋ区、21Ｌ・Ｋ区において範囲を拡張して調査した結果、各遺構の規模を確認するに到った。しかし、建物跡、溝遺構においては、多くが重複関係にあり、又、拡張範囲の狭さもあり、全貌を明らかにするまでに至らなかった。その中で、約５軒の建物跡を構成する柱穴を確認した。以下に建物跡の検出状況を述べる中では、特に17Ｌ・Ｋ、18Ｌ・Ｋ区における拡張区に限った。（附図-2-1）

柱穴には、方形プランを呈するものと円形を呈するものがあり、数的に前者が多く、主に建物跡を構成する例が多い。規模は、大きいもので50cm×50cm×80cm、小さいもので20cm前後のものもある。覆土の堆積は、多量の黄褐色粘土（ロームブロック）や、小さな玉石が入る例が多く全般に固くしまっている。又、その内部にソフトな暗褐色土が入る円形の小ピットがあり、柱の痕跡と思われるものがある。つまり、柱穴に柱を立てて土で埋める掘立技法である。本調査で検出された建物跡においては、この掘立技法を用いる例が大半をしめる。こうした技法の中で、単に土で埋める方法だけでなく、径が５～６cm位の玉石を土と共につめ根固めするもの（18Ｌ区）や、柱位置だけを、柱穴の底を丸く掘りくぼめたり（18Ｋ区）、礎盤を置いて柱を立てる（21Ｌ区）などの例がみられる。又、柱根に角材を打ちこんで支えたりする細工をしているもの（17Ｋ区）もある。特にこうした柱根の支持がなされている柱穴は、大規模なものに顕著に残っている。

以上の様な特徴をもつ柱穴で構成される、いわゆる掘立柱建物跡の中で全貌が比較的明らかなも

のについてみると（附図-2-1参照）桁行４間、梁間１間で、梁間方向が磁北より62°東へ振れている。柱穴のプランは方形で、規模は30cm×40cm、深さは、北東側に並ぶ柱穴は40cm前後で、南西側に並ぶ柱穴は70cm前後ある。柱痕を検出したのは６個で東南側に片寄っている。桁行の長さは、約９ｍ、柱間は2.5ｍ～４ｍと均一でない。梁間の長さは、北西側は4.5ｍ、東南側は５ｍである。

柱穴は、同一建物ではほぼ同じ方向に並んでいるが、柱位置は必ずしも柱穴の中心になく、左右あるいは、上下隅にあり、ややばらつきがある。

他の例では、発掘区域内に分布する柱穴群の中で４～５軒の建物跡が想定される。本例と重複する様に、やや小規模な建物跡が１軒（４～５間と１間）さらに北東部に１軒、北西部に約２軒あるが、いずれも発掘区域外に広がっており、全貌は明らかでない。尚、北西部の建物跡には、円形プランの柱穴も含まれている。又、以上の建物跡の周囲にある小ピット群は、方形や円形プラン等各種存在するが、他の遺構や建物跡に伴う柱穴との重複関係のものも多く、新旧が明らかでない状態で散在している。これら柱穴の覆土には、いずれも白色火山灰が混入している。方形プランを呈するものは、柱痕の底にたまる例が多く、円形プランを呈するものは、覆土上部にみられる例が多く下部あるいは底にたまる例はない。又、両者の重複関係において新旧関係が明らかなものでは、前者が後者を切っている例があるが、その逆は確認できなかった。前者間での重複関係では、大規模な柱穴が小規模な柱穴に切られる例が多い。

こうした多数の柱穴群が重複しながら分布する背景には、一時期に数度も場所を変え、改築が行なわれていたことが想定される。特に本区域内では地下水位が比較的高く、40cm～50cm位掘り下げると水が湧き、完掘後の柱穴内はほとんどに水が溜る。よって、地中に埋められた柱材は水位面での腐朽が著しいことが考えられる。

これらの中でまだ未確認の建物跡が複合していることは明確であり、その検出は今後の課題となる。（藤田　登）

３．竪穴遺構（第３図）

本項で述べる竪穴遺構とは、いわゆる竪穴住居跡とは違い、単なる土倉と思われるものをいうが、21Ｌ、Ｋ区にみられる周溝を有するもの（Ｐ-8、Ｐ-10）では、床面に焼土を伴う例もあり、あるいは住居として使用されたことも考えられる。本調査で検出された竪穴遺構は11基で、そのうち５基（Ｐ-1～4、Ｐ-10）を完掘し、２基（Ｐ-5、Ｐ-6）は地層断面図をとったに留め、Ｐ-7はプラン確認だけに留めた。以下に諸特徴を述べていく。

(1) Ｐ-1

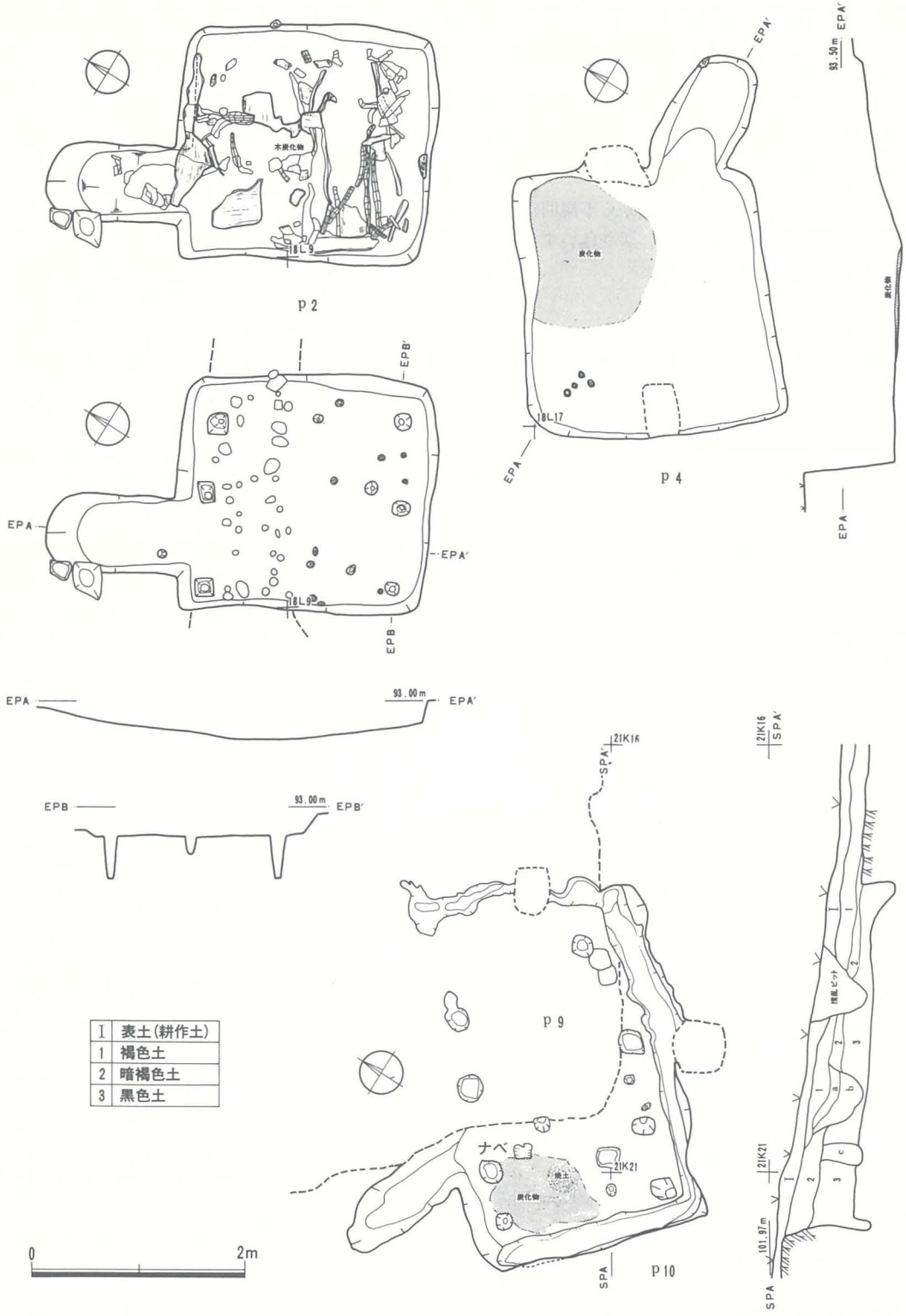
位置；17Ｋ11、16区。確認面はローム上面である。
平面形・規模；長軸は２ｍ、短軸は1.8ｍの長方形で、長軸方向は北東－南西である。長軸方向の北東側に、ゆるやかな傾斜をもつ舌状の張り出しがついている。深さは76cmあり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。
堆積状況；Ⅱ層（暗褐色土）が厚く堆積している。上部には、当遺構東側の集石の一部がみられる。
床面；ほぼ平坦で、堅い。
柱穴；床面で、長軸方向に３個ずつ２列の柱穴が規則正しく配列している。柱穴の直径は約10～18cmで、深さはいずれも10cm以上である。
遺物出土状況；床直上南東寄に鉄鍋がほぼ１個体分出土した。

(2) Ｐ-2（第３図）

位置；18Ｌ３、４区。確認面はローム上面である。
平面形・規模；長軸は2.3ｍ、短軸は2.2mのほぼ方形で、長軸方向は北西－南東である。長軸方向の西側に、ゆるやかな傾斜をもつ舌状の張り出しがついている。深さは最高22cmで、壁は床面から急角度に立ち上がる。
堆積状況；炭化材（板材及び丸材）が、床一面にみられ、火災により全壊したと思われる。さらにその上部にⅡ層（暗褐色土）が薄く堆積する。
床面；中央部が、端の方より低くなるゆるやかな傾斜がある。堅い。
柱穴；床面から56個のピットが検出されたが、溝遺構に伴う小ピットが大半を占める。当遺構のものは、短軸方向に３個ずつ２列に配列されたものと、張り出し部にある１個の、７個と思われる。６個の柱穴の直径は約14～20cmで、深さはいずれも30cm以上であり、張り出し部のピットは、直径８cmで深さは12cmである。

(3) Ｐ-3

位置；18Ｋ１、６区。確認面はローム上面である。
平面形・規模；長軸は1.78m、短軸は1.64mのほぼ



第3図　竪穴実測図(P2, P4, P10)

方形で、長軸方向は北西－南東である。前述にみられる張り出しがない。深さは最高22cmで、壁は床面から急角度に立ち上がる。
堆積状況；粘質の褐色土（ローム）のブロックが大量に堆積しており、極めて固くしまっているので、埋め戻されている可能性が強い。
床面；ほぼ平坦で、堅い。
柱穴；５個の敷設ピットが、床面から不規則に検出された。直径は約10～22cmで、深さはいずれも７cm以上である。

(4) P-4（第３図）

位置；18Ｌ12区。確認面はローム上面である。
平面形・規模；長軸は2.54m、短軸は2.26mの長方形で、長軸方向は北東－南西である。長軸方向東側に、ゆるやかな傾斜をもつ舌状の張り出しがついている。深さはローム上面まで68cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。北東端中央部と南西端中央部で、他の柱穴に切られている。
堆積状況；床直上で、竪穴北よりに床面４分の１に達する炭化物があり、その上に床一面にわたって火山灰が堆積する。覆土は、P-3と同様のロームブロックが厚く堆積する例で、同様に埋め戻されたものと思われる。
床面；ほぼ平坦で、堅い。

(5) P-5

遺構確認のためにグリッドに沿って幅50cmのトレンチを３本入れた結果、ほぼ隅丸方形を呈する当遺構を確認した。今回は、東西セクションの図及び写真による記録に留めた。
位置；17Ｌ17、22区。
規模；北東－南西3.65m、深さはローム上面までで93cmである。北東側に、ゆるやかな傾斜をもつ舌状の張り出しがついている。壁は床面から急角度に立ち上がる。西側へ延びると思われる。
堆積状況；覆土下部はロームがブロック状に堆積しており、多量の礫が流れこんでいる。上部はⅡ層（暗褐色土）が30cm前後堆積している。
床面；堅い。

(6) P-6

遺構確認のためにグリッドに沿って幅90cmのトレンチを１本入れた結果、当遺構を確認した。今回は、東西セクションの図及び写真による記録に留めた。
位置；17Ｌ20、25区。
規模；北西－南東2.92m、深さは81cmである。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。
堆積状況；覆土下部に厚さ２～３cmの炭化物がみられる。覆土中部は壁と区別しにくい暗褐色土の混った固いロームが詰まっていて、埋め戻した様な堆積である。上部には、レンズ状に火山灰が堆積しているが、直径20cm、深さ57cmの覆土中に掘りこまれている柱穴内の覆土にも、火山灰が詰まっている。
床面；ほぼ平坦で、堅い。

(8) P-8（附図-2-2a、2b）

位置；21Ｌ15、21区。確認面は基盤である。
規模；当遺構の南東部約２分の１を検出した。南側に周溝の一部がみられる。深さは20cmで、壁は南側でほぼ垂直に立ち上がり、北側ではみられない。南西側でP-9を切っている。
堆積状況；床面西端で、21Ｌ14区にも広がっていると思われる焼土があり、その上にⅡ層（暗褐色土）が薄く堆積する。
床面；堅く、著しい凹凸がある。
柱穴；現在までのところ８個の柱穴が、規則正しく検出されている。北東－南西の柱穴間（2間）の長さは3.6ｍ、北西－南東の柱穴間（2間）の長さは３ｍで、いずれも深さ55cm以上の角柱である。

(9) P-9（附図-2-2a、2b）

位置；21Ｌ15、20区・21Ｋ11、16区。確認面は基盤である。
規模；当遺構の南東部約２分の１を検出した。P-8、P-10と違って周溝はみられない。深さは26cmで、壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。東側でP-8に切られ、西側でP-10を切っている。
堆積状況；Ⅱ層（暗褐色土）が薄く堆積する。
床面；堅く、著しい凹凸がある。
柱穴；現在までのところ６個の柱穴が、規則正しく検出されている。北東－南西の柱穴間（3間）の長さは5.6ｍ、北西－南東の柱穴間（1間）の長さは1.8ｍで、いずれも深さ57cm以上の角柱である。また、中に石や板材の入っているものがある。
出土遺物状況；覆土中から古銭が２枚出土した。

(10) P-10（附図-2-2a、2b、第３図）

位置；21Ｌ20、25・21Ｋ16、21区。確認面は基盤である。
規模；北西－南東2.5ｍ、深さは南西端で64cmで、壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。北西－南東

方向の西よりに、ゆるやかな傾斜をもつ舌状の張り出しが、当遺構に対して鋭角的についている。南西側から東側にかけて周溝の一部がみられる。東側でP-9に切られている。

堆積状況；床面西よりに炭化物が分布し、その南東部に焼土がある。その上にⅡ層（暗褐色土）が薄く堆積する。

床面；堅く、著しい凹凸がある。

柱穴；８個の柱穴が、北東－南西方向に４個ずつ２列配列されている。北東－南西の柱穴間（3間）の長さは２ｍ、北西－南東の柱穴間（1間）の長さは1.6ｍで、深さはいずれも21cm以上の角柱である。

出土遺物状況；床上に分布する炭化物の上に鉄鍋が出土した。

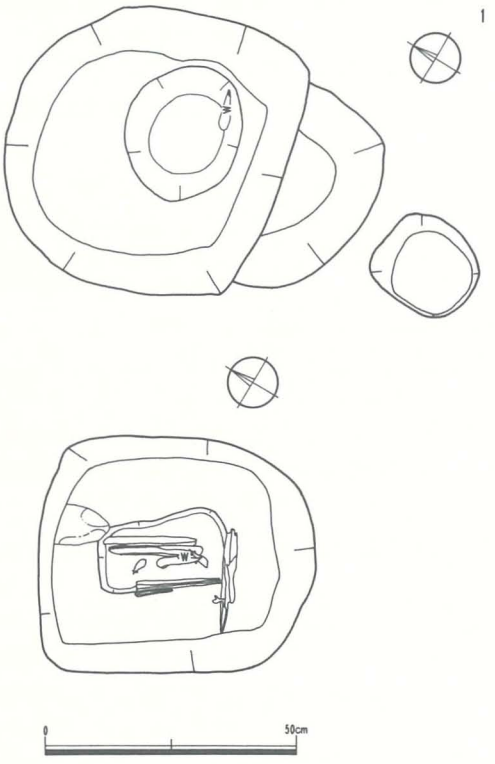
(11) P-11

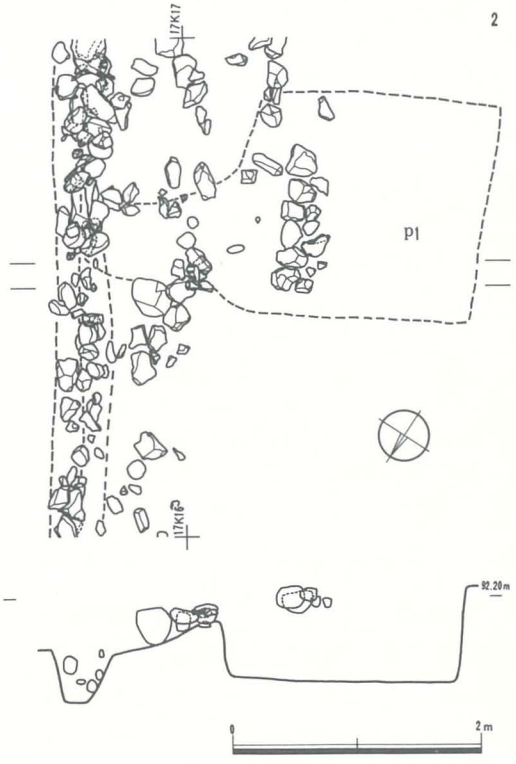
当遺構は、21Ｊ区において４ｍトレンチを入れた時点で、21Ｊ22区南端ローム上面で一部確認した。現在までのところ、北西－南東1.31ｍ、深さ10cm前後で、壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。Ⅱ層（暗褐色土）が薄く堆積している。床面は基盤で堅く、著しい凹凸がある。床面からピットが２個検出されたが、当遺構とほぼ同じ深さであることから、切り合いと思われる。　（中村公宣）

４．溝遺構（附図-2）

先に述べたが、本調査で検出された溝は、発掘区ほぼ全域より発見され、プランの確認だけに留めたものも含め約20本位である。いずれも発掘区を横切る様に（ほぼ東西方向）に直線に走り、18Ｌ区の密集する地区以外は溝と溝との間隔が７～８ｍで南北に広く分布する。最大幅60～80cm、深さ40～50cmがほぼ全般にみられ、内部に円形小ピットが無数付設する。覆土は、一様に暗褐色土が堆積し上部に灰色火山灰が堆積する例もある。覆土中の出土遺物は散発的で陶磁器破片や古銭が若干みられる程度である。

本遺構においては、やはりその全貌をみる為に一部拡張（17Ｌ・Ｋ、18Ｌ・Ｋ区）を試みたが、想定された以上の大規模なもので、全様の把握ができなかった。しかし、当初ほぼ東西方向に平行して一直線に走ると思われていた溝が屈曲し、方形に回るか、Ｌ字状あるいは、コの字状にめぐることがわかった。それによると、長軸は約17ｍ、短軸





第4図　1.建築材出土状況，2.集石状況

が約7m、長軸方向はほぼ東西方向を示す。又、溝の長軸に沿って掘立柱の柱穴が並ぶが、短軸に沿って周囲に並ぶ柱穴及び柱穴様ピットはまったくみられない。ただ一例として18K区でみられる様に溝が方形にめぐる中に掘立柱建物跡が沿うようにあるが、他の例からみても偶然性の可能性もある。しかし、溝の構造から考察すると、塀（かこい）の可能性もあり、掘立柱建物跡との関係が問題となるが、さらに広域な調査が待たれる。又、溝間での重複も多くみられ、掘立柱と同様の構造を持つことから、やはり一時期に数度の建て替えが行われていたと思われる。　（藤田　登）

5．集石（第4図2）

本項で述べる集石とは、17K11区の溝遺構、16区の竪穴遺構覆土中に集中して出土したものである。いわゆる遺構とは性格を異にするが、あえて取りあげた。

建物跡部においては、当時の家屋として想定できるのは、掘立柱建物跡であるが、これらが位置する広域な平坦部（台地）から察すると、他に礎石をもつ建物や石垣等の遺構が存在することも考えられる。

建物跡部の発掘区内においても、礎石の建物跡と思われる例があり、17L区のP-5の南側にローム面に埋没した大きい礫が3個発見されている。又、本敷地内においても、石造りの遺構が発見されている。それは北東側、宮の沢の左岸に位置する荒神堂跡で、石づみの基礎と思われるものである。よって集石については、中世遺構の所産と考えられる。尚、第15図1の摺鉢は集石より出土しており、他に数点の摺鉢破片が出土している。

（藤田　登）

Ⅲ　遺物

本調査によって出土した遺物は、陶磁器、鉄製品、銅製品、石製品、古銭、骨角製品、その他（木製品、漆器、自然遺物の魚骨、獣骨、歯、貝殻、炭化材、木材片）等がある他、縄文時代の土器、石器も多量に出土し、中には復元可能土器や完形品の石器等が比較的多く含まれている。しかし縄文時代の遺物については、まだ整理中であり、本書では掲載を見送り、詳しくは、稿を改め述べていきたい。遺物の出土状況においては、壕跡部（特に魚貝層）より出土する例が多く、建物跡部の最北端16L4・5区では、摺鉢片や壺片あるいは縄文時代の土器石器が集中して出土した。陶磁器、鉄製品、銅製品、石製品等については、近代に至るものも含まれており、整理の段階で古いもの、新しいものの整理分析を行ったが、時代決定までは至らなかった。しかし、陶磁器については、整理中特に、東京大学名誉教授三上次男先生、金沢大学助教授佐々木達夫先生の両先生には、御多忙の中貴重な御意見をいただき、ある程度の時代決定をみることができた。

1．陶磁器（第7図～第14図）

陶磁器製品としたものには、坏、皿、碗、壺や甕、摺鉢、沈子がある。これらの製品には、舶載陶磁器の白磁、染付、青磁と、国産陶磁器の生産地が明らかなもので、瀬戸、美濃、唐津、志野、越前、伊万里があり、その他不明なものとして、地方窯のものを一括した。

舶載陶磁器（白磁、染付、青磁、天目）

a．白磁（第5図）

完形品は一例もなく、復元可能なものが数例ある他は破片である。その中で図上復元の可能なものを掲載した。それらの破片等から想定すると、器形は、坏、皿、碗、小壺があり、皿が圧倒的に多い。（1～4、6～9）

口径は12cm前後のものが多く、器高は3cm前後にまとまりをみせる。いずれも高台を持ち、口縁部は外反する。9は高台付近から一気に外反している。胎土は灰白色で精良で黒色の結晶が混じる。釉調は、1、2、4、7は、乳白色を呈し、3、6、8、9は暗い乳白色を呈す。又、1、3、7、8の高台座や内部に小砂が付着している。10は坏と思われる。胎土は白色で精良である。細粒の黒色結晶が若干混じる。釉調は白色で見込みには一条の円圏がみられる。高台内部には施釉されてない部分もある。11は、油容器（小壺）と思われる。図上復元から想定すると、器高は約8cm～9cmであろう。胎土は白色で精良である。釉調は白色で高台座を除い

て外面に施釉されているが、内面には、施釉されていない。高台及び内面底部には、黒色の油塊が付着している。

b．染付（第６図～第８図21、22）

染付の出土量は比較的多いが全て破片である。その中からほぼ完形に復元されたものは、一例のみである(13)。破片から想定すると器形は、坏、皿、碗があり皿が主流を示す。

口縁は外反するものと直立するものがあり、外反するものが多い。底部の形態は、碗は出土例の中では高台を持つものだけだが、皿については、口縁部が外反するものは明瞭な高台を持ち、直立するものは碁笥底高台が多い。12、13、14胎土は、白色系が多く精良である。碁笥底高台をもつ皿類の胎土は黄白色で粗なものと、青みがかった灰色でやや精良なものがある。釉調は、青白色のものが最も多く、青緑色(12)や、やや茶色がかったもの(22)もある。施文される青料は、青と藍色、やや緑色をおびるもの等がある。

文様は、牡丹唐草文、波濤文、蓮弁文、寿字文、福字文、人物文、花蝶文があり、皿には、牡丹唐草文(15)が圧倒的に多い。12～13の寿字文は、碁笥底高台の皿に多い。明瞭な高台をもつもの(21)にも文字を図案化したものがある。19の蓮弁文や、口縁部の内外部に施される波濤文は碗に多い。又、碗類には文字を図案化したようなもの(17、18)もある。20は、高台内部に「大明宣徳年造」の年号銘が付されている。

c．青磁（第８図～第９図）

出土量は白磁よりやや少なくすべて破片である。想定される器形は、皿、碗が多い。口縁部は、皿は大半が外反するが、碗は外反するものと、直立するものがある。すべて高台を持ち、器厚は全般に厚手のものが多い。中でも碗類の高台部破片には、極めて厚く重量感のある製品があり、鉢類も想定される。(29)

皿は、口縁が大きく外反し、体部に明瞭な稜をつけている稜花形のもの（23、24）が多い。胎土は、灰白色か青みがかった灰色で精良であるが、底部が厚作りの為か、淡黄褐色を呈するものもある。釉調は、濃緑色や淡い青緑色を呈し全般に厚くかかっている。内部には、施釉されていない例が多く、露胎しロクロ痕を残している。文様は、大半に劃花文（23、24、25）を施してあり、口縁部の内面や外面、あるいは見込等にみられる。23の高台内部には、「大」の字が付されている。

碗は、皿より少なく主に高台部の破片である。胎土は皿とほぼ同じだが、全体に淡黄褐色を呈するものや濃灰色のものがある。釉調は、緑色、灰色がかった淡緑色、茶色があり、皿よりは薄くかかっている。高台内部にはほとんど施釉されておらず露胎している。文様は、蓮弁の劃文(27)が主流をなし（28）の様な劃花文を伴用する例もある。尚、口縁部が外反するものについては、劃文を有するものはみられなかった。

d．天目（第10図）

出土した天目は、皿と碗があり比較的多くの出土量をしめ、その大半が口縁破片である。想定される器形は皿と碗で、碗が圧倒的に多い。これらの製品には、舶載製品と国産製品があり、国産製品の主流は瀬戸、美濃系と思われる。舶載天目は33～35の碗と、36～37の皿である。碗は、口径が12cm前後、器高が６cm前後である。口縁部の反返しが強いものと弱いものがあり前者は、体部がほぼ直線的だが、後者はややふくらむ。高台内部は丸みを呈す。胎土は淡い灰色だが、体部上半部から高台にかけて淡黄褐色を呈している。無釉の部分は、33と35は褐色だが34は濃灰色である。胎土は、やや精良で33には透明な結晶がまじる。釉調は、33と35は濃茶色で34は黒色である。

皿は、口径が12cmで碗とほぼ同じである。器高は2.5cmである。口縁部の反返しは弱く体部に綾を有す。高台内部は浅く平坦である。胎土は、濃灰色と黄褐色で碗よりもやや粗である。大粒の乳白色の結晶が混じるものもある。(37) 無釉の部分は灰色と褐色である。釉調は、黒色と褐色が混じり合い黒色が強いものと褐色が強いものとがある。

国産天目は、31～32、38である。口径、器高は舶載製品とほぼ同じである。口縁部の反返りはやや弱いが体部上半部はふくらみをもつ。高台内部は丸みをもち(32)はやや深い。胎土は極めて粗で淡黄灰色を呈す。無釉部分（31）は褐色を呈すが、32は胎土と同じである。釉調は、31は黒色が強い褐色で見込み中央部では緑色を呈する。32は濃褐色土である。38は、小皿で口縁部はほぼ直立し高台内部が浅く、明瞭な高台を持たない。胎土は乳白色で極めて粗、釉調は黒褐色で、口縁部内面に施釉されているだけである。露胎は濃褐色を呈し

ている。

国産陶磁器（瀬戸、美濃、唐津、志野、越前、伊万里）

瀬戸、美濃（第11図～12図）

本調査で出土した陶磁器の中で一番多い出土量を示し、そのほとんどが灰釉の小皿で、碗は極めて少ない。完形品はないが、口縁部の一部が欠損する程度でほぼ完形に近いものが30点余りある。口径が12cm前後の普通の大きさのもの、口径が8cm～10cm前後のもの、口径が6cm前後の小形のものがある。小形のものは、坏と思われる。器高は2cm～2.8cm前後である。口縁部形態にはほとんど差がない。高台はいずれも明瞭で、内部は浅いものと、やや深いものがあるが、数量的には片寄りはみせない。器厚は4mm前後が一般的である。胎土は乳白色で粗である。白色透明の結晶が混じる。灰釉は淡い黄緑色、灰緑色、緑色を呈するものがある。全面に施釉される例が多いが、高台内部が露胎している例も多少ある。これらの中で釉調がガラス質のものでは、見込み中央部に印花文が施文されている例が多い。文様は、菊(42、43)、梅(45、46)、桜(49、51)、酢漿草(50)、椿(47)があり、菊の印花文が多くみられる。又、重ね焼の痕跡を有するものも多く、見込みや高台の内部に輪状の形で残っている。39は、完形品で一例のみである。折縁皿といわれる小皿で、整形、施釉、胎土も極めて粗で、焼が甘く全体に粗雑な製品である。55は、碗で図上復元の可能な唯一の例である。口径は、12cm前後、器高は6.5cmである。口縁部はほぼ直立し、体部がやや丸みがある。明瞭な高台を持ち、胎土は灰色を呈し粗である。釉調は淡い緑で表面に気泡を有す。高台内部には、重ね焼の痕跡がある。

唐津の製品は極めて少なく、第5図5、第10図40の皿の他、碗類が数点出土しただけである。第5図5は、口径10cm前後、器高3cmの小皿で、口縁の反り返しが強く体部は若干丸みを呈し明瞭な高台をもつ。胎土は乳灰色でやや粗、釉調はやや緑がかった乳灰色を呈し、唐津製品の中でも極めて新しいものと思われる。第10図40は、口径11cm前後、器高3.5cmの小皿で厚作りである。口縁は若干内弯し高台をもつが、成形が粗雑である。胎土は赤褐色を呈し粗である。乳白色の結晶が混じる。釉は乳灰褐色で露胎部は、胎土と同色である。全般にロクロ成形や施釉が粗雑である。

志野の製品も極めて少なく、出土したものは碗である（ＰＬ16）。絵は見込みに施文されている。胎土は、乳白色と乳黄褐色があり、前者はやや硬質で、後者は軟質で前述の瀬戸、美濃の胎土に類似する。釉調は乳白色で無数の気泡が外面に多くみられる。口唇部は赤褐色を呈している。見込みに青色の色絵で文様を施している例もある。又、伊万里の製品と思われる小破片が2点出土している。尚、天目については、前述の舶載陶磁器の天目の中で述べている。

本調査で出土した越前系の製品は、ほとんどが摺鉢で、中には壺と思われる破片も数点みられる。摺鉢（第13図～14図）は、すべて無釉である。出土状態は、壕跡部、建物跡部より多量の破片が出土しているが、復元されたものは一例のみである(1)。

口縁部形態には、ほぼまっすぐに立ち上り、口縁内面と口唇に一条の凹を有するもの(1、8、11)と、口唇部の凹がないもの（4～7）、やや内弯ぎみのもの（3、10）がある。口径は、1の31cm前後を計るものが多く、特に大小の較差はない。胎土は、赤みがかった濃乳灰色（3～6、10、12、14、15）と乳灰褐色（1、2、7、9、11、13、14）があり、前者は硬質感があるが、後者は軟質的である。又、両者共に乳白色の結晶が多く混じる。器面の色調は、濃灰褐色、赤灰褐色、赤褐色、乳黄褐色等がある。14は、内外面に鉄が塗られている。外面には、ロクロ痕が残るが内面は平滑に仕上げている。これらの内面に施される櫛歯による卸し目は、1単位が6条～12条の7種類があり、9条～11条の3種類が比較的多い。櫛歯の幅は、2mm前後が多い。条痕は、大半が角ばるが、丸みを持つ例もある(6)。施文方法は、一般に左回りである。2にみられる底部内面に施される条痕は右回りである。又、大半は器体内の底に近い部分の摩耗度が激しいが、2のようにほとんど摩耗がみられず、内外面にスス状の付着がみられる例などから、中には火にかけて用いるものもあると考えられる。

壺（9）は、同一個体と思われる底部もあるが体部破片がなく図上復元もできなかった。胎土は灰色で硬質的であり乳白色の結晶が混じる。全体に鉄分が塗られており、さらに灰釉がかかっている。その他の例では、内面に鉄分が塗られているものや自然釉のものがある。

その他、地方窯の製品としては数点の碗、皿、徳利がある（PL16）。（第10図41）

41は、体部下半を欠損するもので、口縁部は段を有する。胎土は灰色でやや粗である。釉調は黒褐色を呈し内外面に施釉されている。

沈子（第14図）

13点出土しており完形品はすべて図示した。形態はすべて円筒形でやや細身と太身のものがある。色調は黄褐色と褐色土で、胎土には、砂粒が多量に混じる。5は、施釉される例で一例のみである。胎土は乳灰色で精良である。釉調は褐色を呈す。（藤田　登）

2．鉄製品（第15図～第16図）

本調査で出土した鉄製品は主に壕跡部の魚貝層より出土したが、その中で鉄鍋は建物跡より出土する例が多い。

刀（第15図1、3）

1はほぼ完形で、全長31cmを計る。茎に目釘孔が1ヶ所ある。刀身は物打部分が最大幅となり3.5cmを計る。鋒をやや欠損する。平棟、平造、片刃である。やや先反りとなる。銹化が進み脆い。全体に木質状の附着物がみられる。3は先端部のみである。土堤の盛り上げ土Ⅰa層よりの出土である。平棟、平造、片刃である。木質状の附着物がみられる。

刀子（第16図2、4～7）

錆のため明確ではないが、図示したものは片刃造、平造である。2は木質の附着物がみられる。平棟である。4はほぼ完形である。全長23cm、刀身の長さ16.8cm、木柄部は6.2cm、身幅は約2.4cm、やや先反りである。5は棟部中央を欠損し折れ曲がっているがほぼ完形に近い。全長21.4cm、刀身の長さ約14.3cm、身幅は2.1cmである。茎部には若干の木質の附着物がみられる。平棟である。6は完形品である。錆の附着物が少ない。魚貝層よりの出土である。全長22.5cm、刀身の長さ13.5cm、身幅は約1.4cmである。平棟である。7は6と同型のものと思われる。刀身の上半部及び茎を欠損している。

庖丁（第15図8）

8は時期が幾分新しいものと思われる。柄部、刀身先端部、刃部をわずかに欠損しているが完形に近い。全長25.6cm、刀身の長さ19.5cm、身幅最大で5.1cmを計る。

小札（第15図9～11）

9は上端が狭く下端に向けて側縁がやや広がる。札頭はやや鋭く、下側縁は丸味を帯びる。平小札と思われる。10は小孔を二行あけ右7孔、左7孔である。札頭は半円形の二連の小札頭となっている。札足6.3cm、札幅2.4cmである。伊予札といわれているものである。11は小孔を三行あけ計21孔である。三つ目札かと思われる。札足6.5cm、札幅約3.5cmである。

鉄鏃（第15図12～14）

12は尖頭部を欠損する。茎部は大半を欠く。残存部長6.0cm、鏃身は下部は円錐形、尖頭部へいくに従い偏平となる。13はほぼ完形で全長9.3cm、鏃身3.4cm、茎部は5.9cmである。茎部は先端にいくに従い細くなる。14は鏃身右縁辺をやや欠損するがほぼ完形であり、全長13.1cm鏃身7.0cmである。尖頭部は偏平である。左右にほぼ直角に張り出す逆刺をもち鏃身中央部より下部にかけては断面円形である。茎部は先端部がやや細くなり断面方形である。

釘（第15図15～22）

15はやや幅広である。16～19は比較的小型のものである。20～22は大型に属する。20は頭部の折り返しが大きい。鉄製品中最大の出土量である。

鎹（カスガイ）（第15図23～26）

23、25は尖頭部がやや長く、大型のものである。24は薄手であり、一方がやや幅が狭い。別の用途に使用されたかもしれない。26は腐蝕度が著しい。

釣針（第16図27～30）

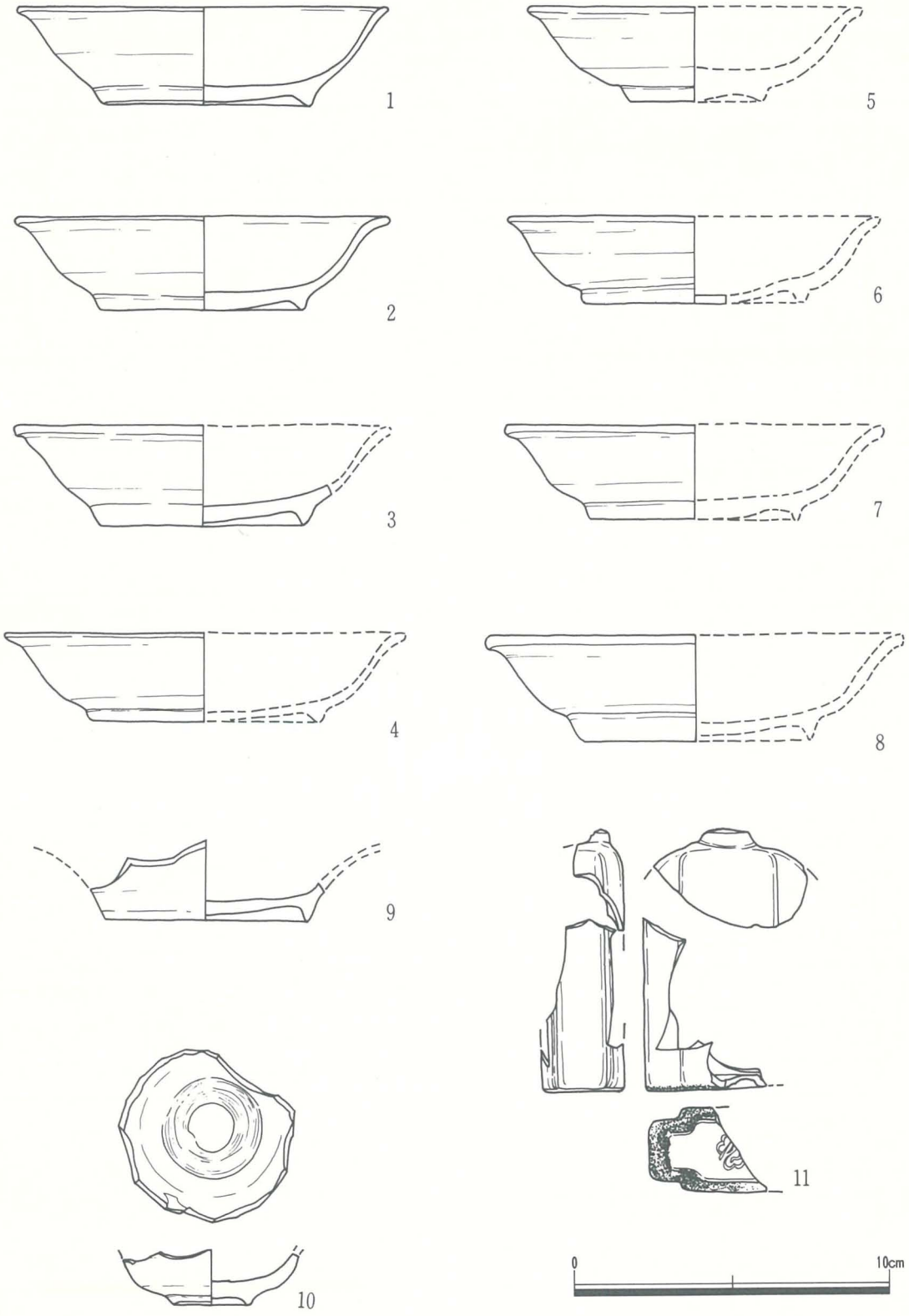
27は釘を再利用したものである。頭部より$\frac{2}{3}$の箇所でほぼ直角に曲げ、さらに先端でわずかに上へ反らせている。28も角釘を再利用したものである。29は内鐖式のものである。

鎌（第16図31、39）

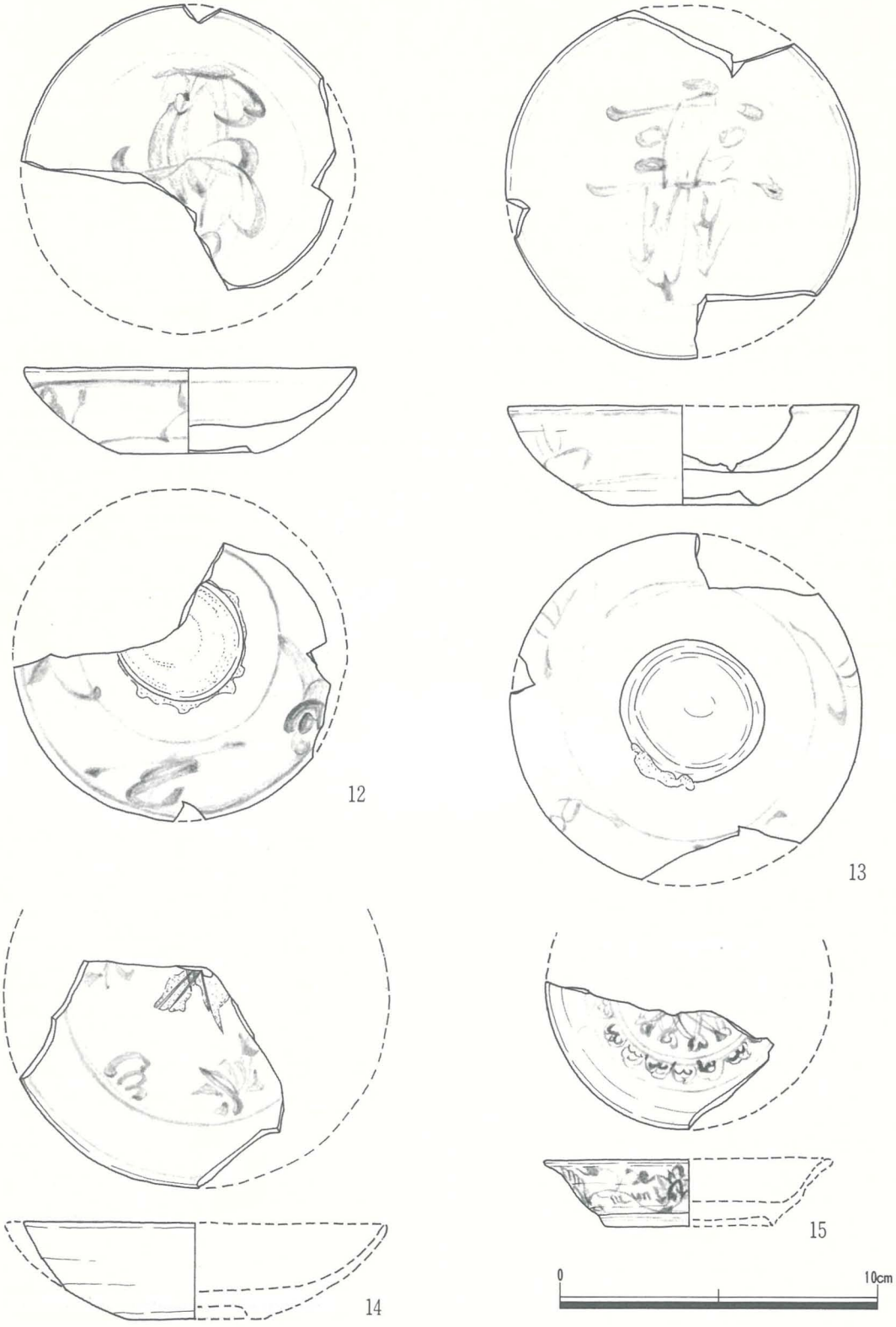
先端部、柄部を欠損している。身の残存長12cm、刃部残存長約7cmである。刃部には若干刃が残存している。39はほぼ完形品である。刃部の長さ約3.5cm。非常に小型であり別の用途に使用された可能性がある。

箍（ヤス）（第16図36）

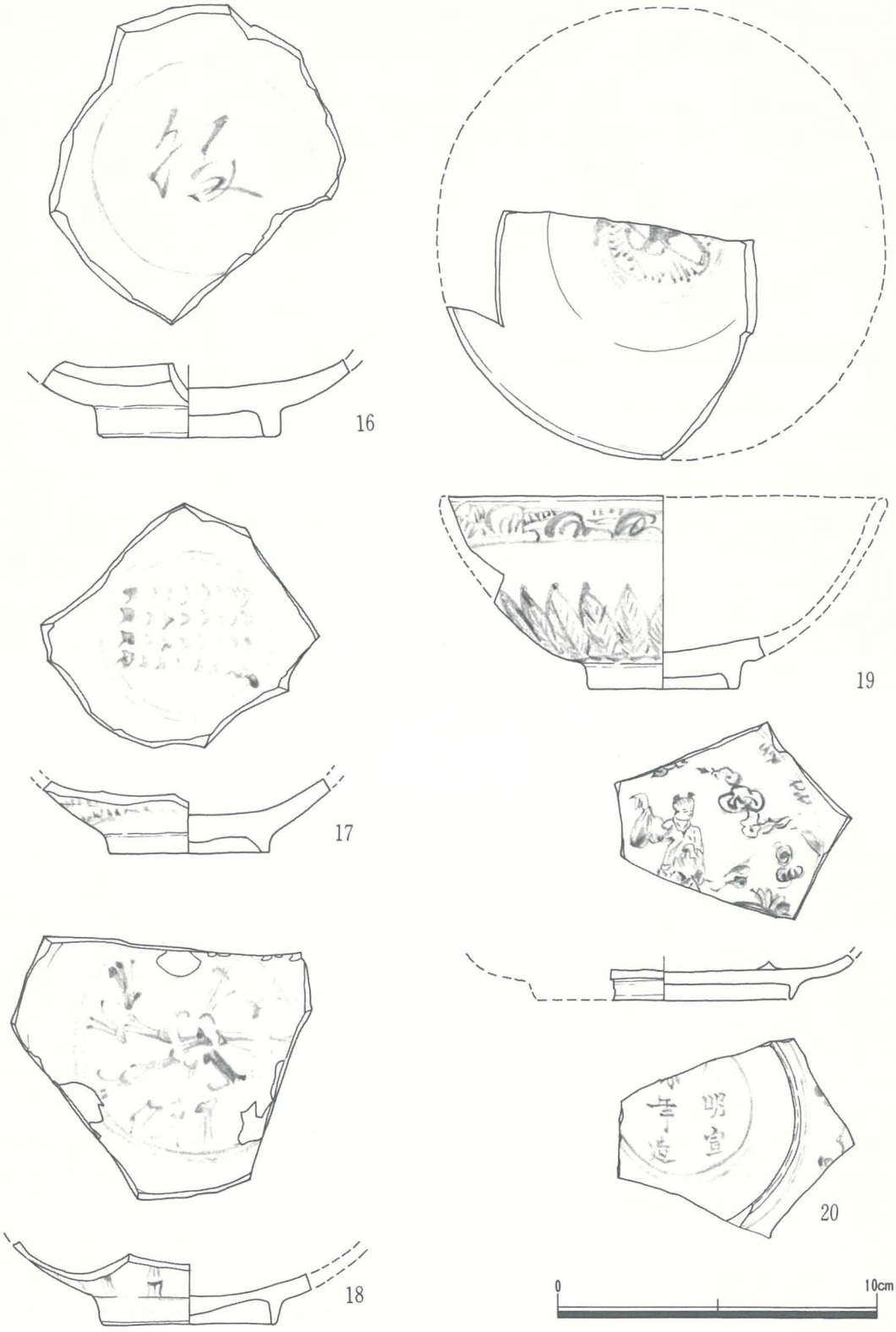
上部は断面が薄く偏平であり、先端部は円形で尖っている。アワビ用の三本箍と思われる。腐蝕が著しい。



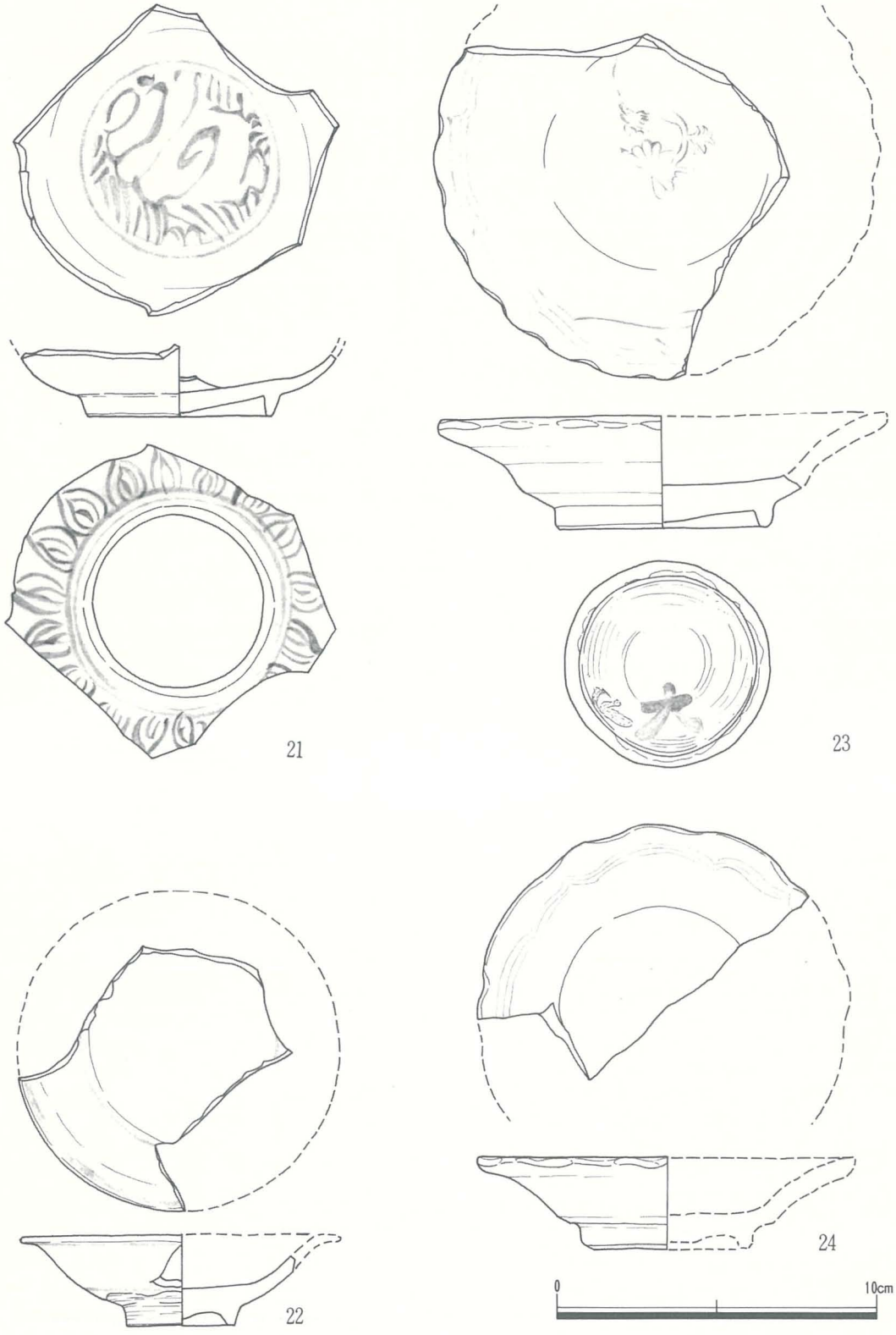
第5図　舶載陶磁器(白磁)



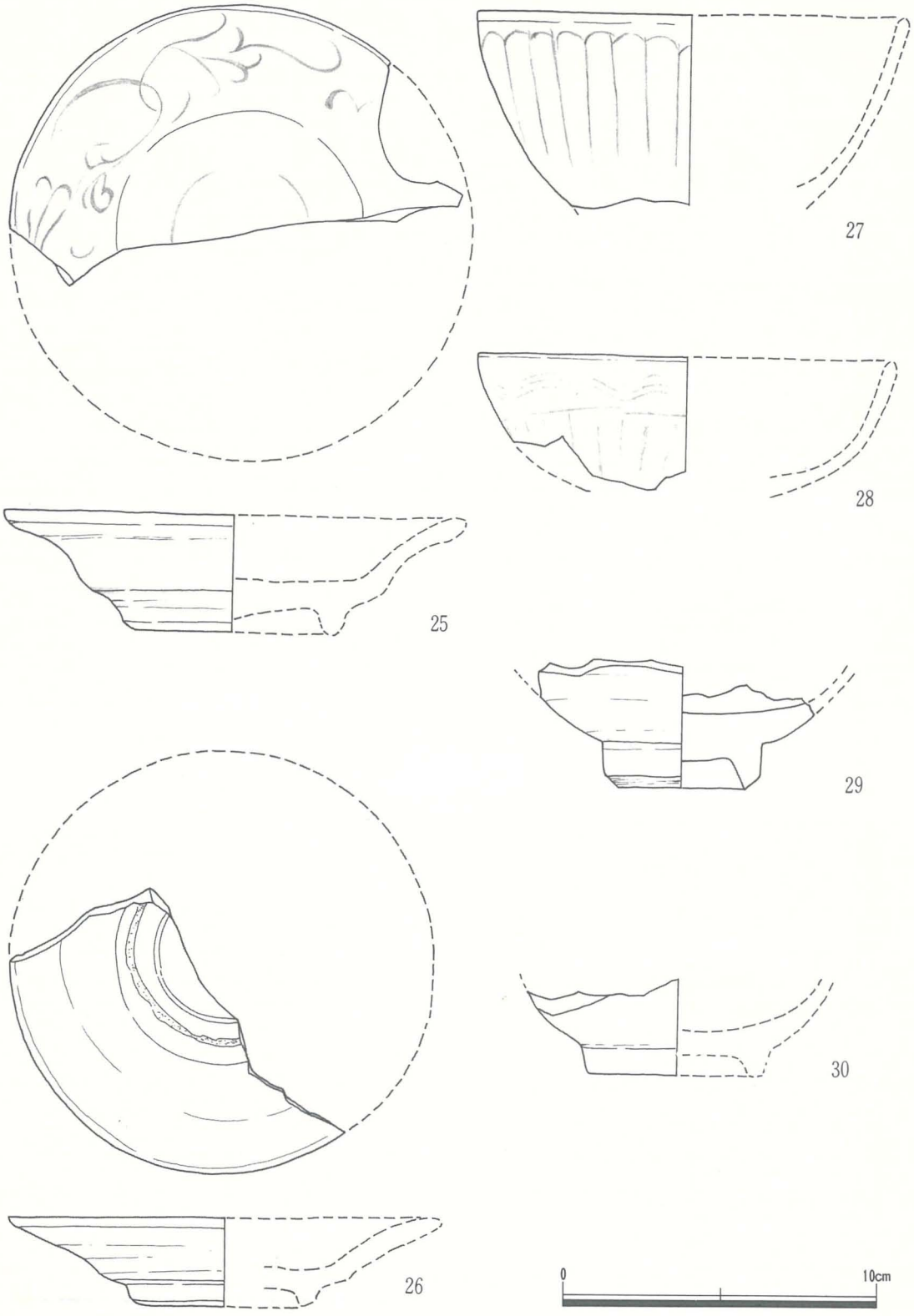
第6図　舶載陶磁器(染付)



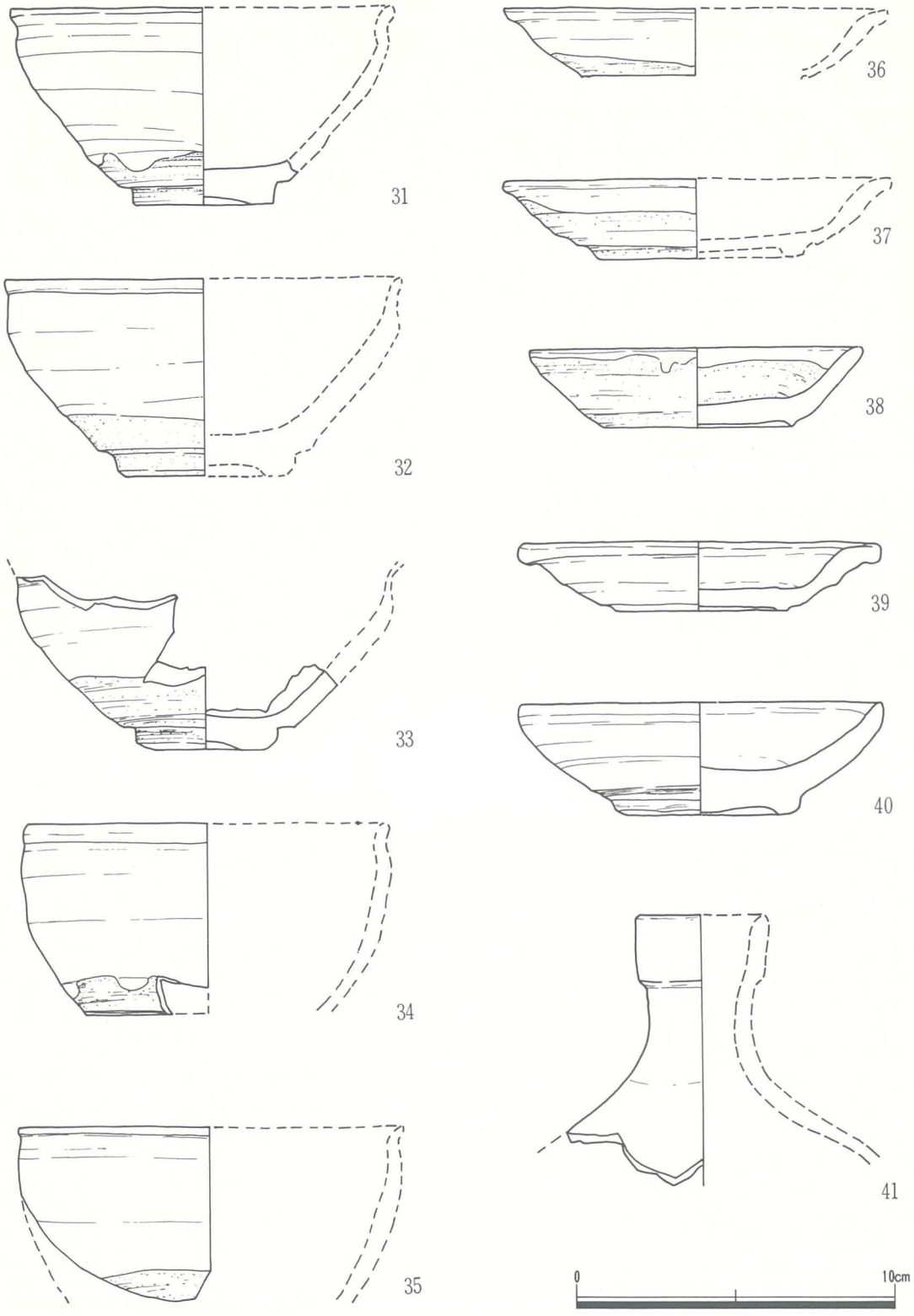
第7図　舶載陶磁器(染付)



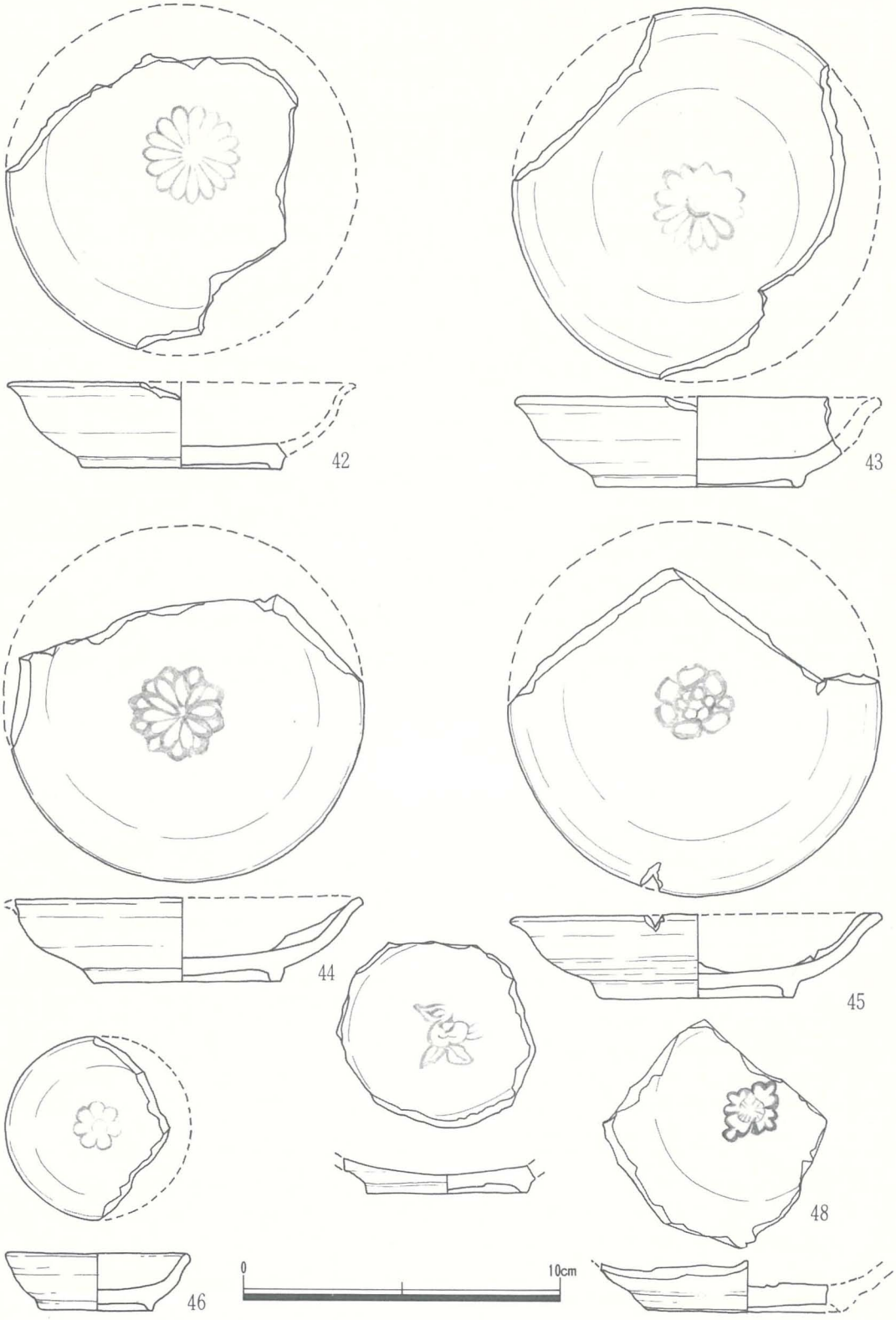
第8図　舶載陶磁器(染付，青磁)



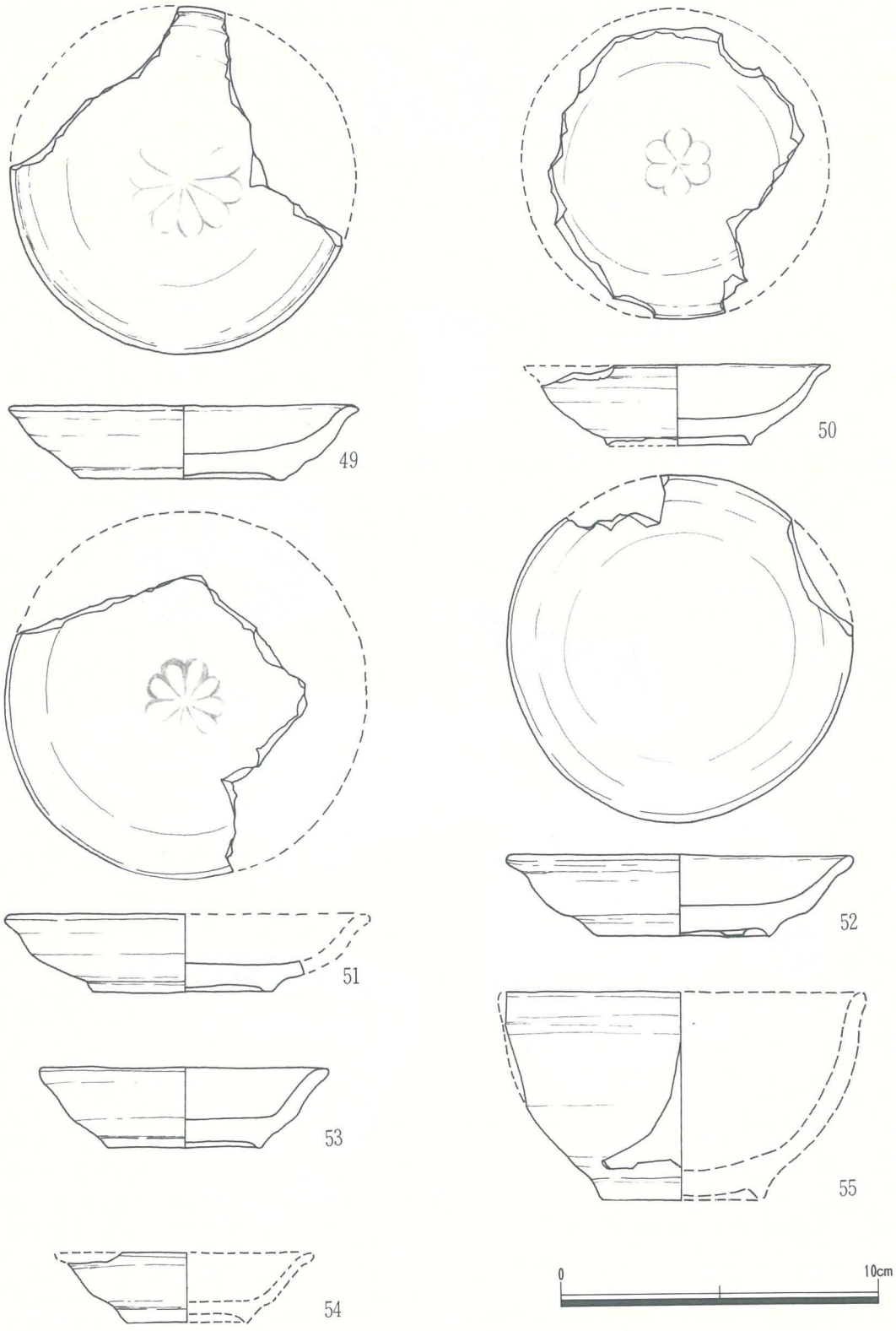
第9図　舶載陶磁器（青磁）



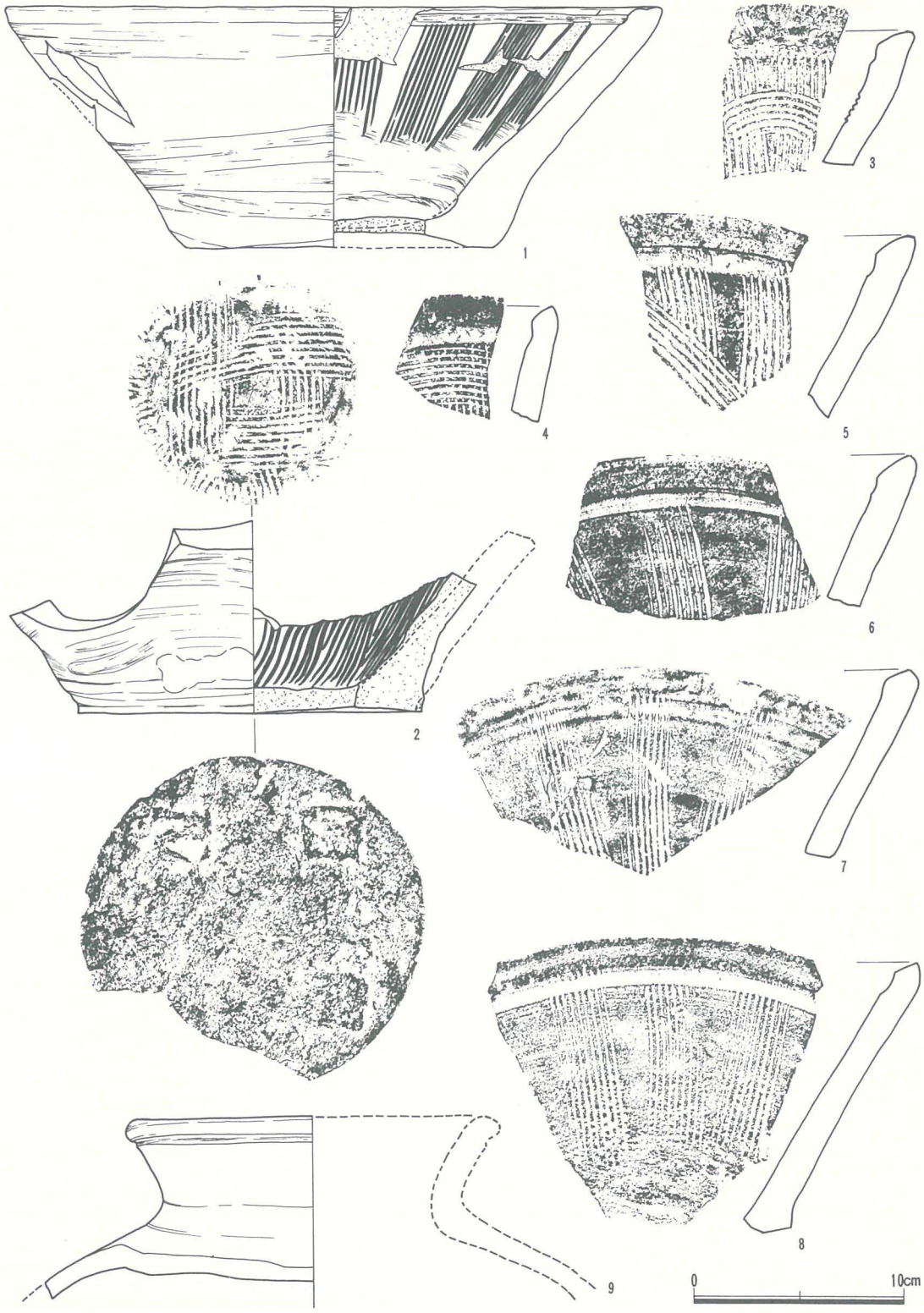
第10図　舶載陶磁器と国産陶磁器（天目，唐津）



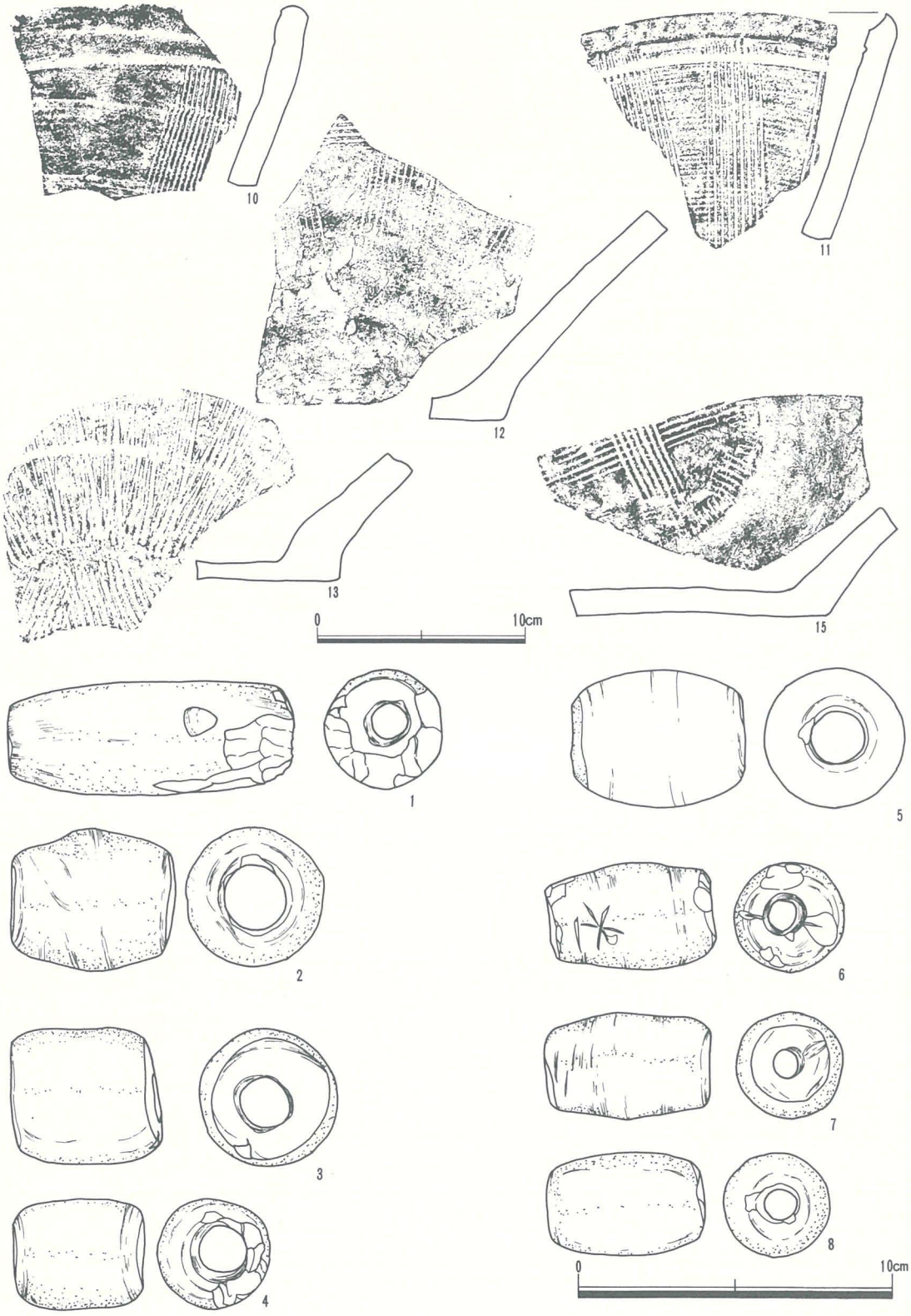
第11図　国産陶磁器（美濃，瀬戸）



第12図　国産陶磁器（美濃，瀬戸）



第13図　国産陶磁器(摺鉢,壺)



第14図　国産陶磁器(摺鉢,沈子)

鉤(カギ)(第16図37、44)

37は中央部より先端にかけて錆の附着が著しい。断面方形で、上部は極めて細くなり外へ曲げている。44は上部が薄く断面方形を呈し、先端にいくに従い断面円形となる。先端部をわずかに欠損する。

火箸(第16図32～35)

図示したものすべてに上部より中央部にかけてねじれが走る。中央部より下部にかけて断面方形となり徐々に細くなる。腐蝕はねじれ部が著しい。32は残存長33.3cm、ねじれは右巻き。33は残存長29.1cm、ねじれは右巻き。頭部は環状となる。34は残存長23.2cm、ねじれは右巻き。35は残存長21.8cm、ねじれは左巻き。

錐(第16図38)

先端部が欠損している。残存長8.7cm、断面方形。中央部がやや太い。

鉄環(テツカン)(第16図41～43)

41～43まで形態はさまざまだが、鎌等の作業用具の留め金具として用いられたものと思われる。

燭台(シヨクダイ)(第16図40)

突出部上部、下部及び周縁部一部を欠損する。直径4.0cm。

火打ち金(第16図49)

錆の附着が著しい。三角形底辺部である左直線面が使用面となる。

鉄鍋(第16図45～47)

いずれも図上復元である。45は口縁部付近がやや外反する。最大径は口縁部で直径約29.5cmである。46もほぼ同形であるがやや大型である。内耳がある。最大径は口縁部で直径約36cmである。47は残存部最大径約33.5cmである。

鍋鉉(ナベヅル)(第16図48)

鉄鍋の鉉である。断面薄く偏平である。

尚図示していないが鎧の一部が出土しており、現在アルコール90%溶液中で保存している。どの箇所のものかは不明。(斉藤邦典)

3．銅製品(第16図、第17図)

(1)鏡(第17図1～3)

4面出土している。

1は菊花双鶴鏡で、鈕は亀で上に向い、双鶴と接嘴する。内外両区にわたって菊を散らしており、また、界圏を二重にしている。直径6.7cm、鏡の厚さ0.15cm、縁の高さ0.2cmである。時代は室町期と思われる。

2は菊花双鶴鏡と思われるが、半分より出土しないために鶴は1羽より確認できない。鈕は捩菊状である。内区に菊を散らし、外区は内外2つに分けて櫛歯文帯をめぐらしている。直径およそ7cm、鏡の厚さ0.2cm、縁の高さ0.5cmである。

3は内外両区にわたって亀甲文様が施されているが、3分の1の出土のため、鈕や鳥の種類等は不明である。直径およそ11cm、鏡の厚さ0.2cm縁の高さ0.5cmである。

なお、図示していないものに蓬来鏡が出土している。これは、鈕が亀で下に向っていて、内外両区にわたって蓬来文様を表わしている。直径11.7cm、鏡の厚さ0.2cm、縁の高さ0.6cmである。時代は室町期と思われる。

(2)笄(コウガイ)(第17図4、5)

腰刀に附属した用具で2点出土している。

4は、頂部耳掻きが丸味を失い角張っており、竿の部分が折れ曲がっている。蕨手はないが、地板に直接施された花輪違い紋と思われる文様が5個つけられている。長さ19.7cm、幅1.2cm、厚さ0.3cmである。

5は、頂部耳掻きが丸味を失い角張っている。蕨手はないが、胴部中央に文様をとり付けるために用いたと思われる、直径0.3cmの貫通孔がある。長さ21.2cm、幅1.2cm、厚さ0.3cmである。

(3)煙管(キセル)(第17図12、13)

12は同一区の同一層位から、火皿の部分と吸口の部分が出土したもので、本来同一のものの部分品と思われる。前者は雁首で、火皿の直径は1.3cm、身の部分の長さ3.4cmで、後者は長さ4.5cmで、共に竹管と思われる羅宇がみられる。

13は吸口の部分で、直径1.3cm、長さ5cmで竹管と思われる羅宇がみられる。

他に、煙管の吸口部と思われる長さ4.5cmのものが出土したが、つぶれて原形をとどめていない。

(4)鉏(ハバキ)(第17図6)

刀の鐔もとを固める金具で3点出土した。

6は、右上端に呑込みがみられる。縦の長さ3.1cmである。

(5)香炉(第17図11)

4分の1周ほど残っており、現存部高さ7.7cm、器厚0.2cmで、耳がついている。胴部中央に幅2cm

で唐草文様が施され、その上下に各々２本の沈線がめぐらされており、光沢がある。下部は、菊輪文様が施されているが、磨滅が著しい。

(6)銅鐶（ドウカン）（第17図14～16）

14は長径4.9cm、短径3.8cmの楕円形で厚さは直径0.3cmである。

15は長径3.9cm、短径3.7cmのほぼ円形で厚さは直径0.3cmである。

他に出土例も極めてなく用途は不明である。

(7)その他（第16図51、第17図７～10、17～19）

７は、長さ2.25cm、頭部幅1.7cm、内径1.0cmである。直径0.3cmの銅を2つに折り曲げて作られている。

８は、現存部で長さ4.7cm、幅0.7cmで、両端の欠損状況からみて、想定される形はリング状のものと思われる。

９は、綿嚙の留金で、長さ3.3cm、幅1.1cm、厚さ0.2cmで、直径0.55cmの孔が２つ並んで穿たれている。

10は、長さ3.6cm、幅0.3cm、厚さ0.15cmで、右側に２個の突起がある。

17は、現存部で長さ4.5cm、幅3.7cm、最大幅0.9cmの硯状に成形されたものであるが、残存部が少なく詳しくは述べられない。

18は、口縁の破片から想定すると香炉かもしれない。最大径がおよそ11cm、器厚は0.1cmである。

19は、胴部最大径6.8cm、底径5cm、器厚0.2cm、現存部高さ2.8cmである。口唇部を欠いており、胴部上は折れ曲がっている。

51は、注口部のみで、長さ5.4cm、最大幅3.3cm、器厚0.15cmである。吊耳部分に鉉の一部がついている。片口鍋の注口部と思われるが、他遺跡では鉄製のものが多い。（中村公宣）

４．石製品（第18図）

本調査では、図示した14点の他に小片が数点出土した。壕跡より出土のものが多い。主に砥石である。大きさは、長さ３cm、幅2.1cm、厚さ0.4cmの小さなものから、長さ23.9cm、幅5.7cm、厚さ5.６cmの大きさのものまである。形状は、平面形では方形や棒状のものがあり、断面形は方形や台形を呈するものがある。使用面は全面、あるいは２～３面で、中には中央部が孤状に大きく凹むものもある。なお、使用面が著しく磨滅して擦痕が顕著に残る例は少ない。

14は、現存部で長さ2.2cm、幅3.7cm、最大幅は１cmである。硯状に成形されているが、残存部が少なく詳しくは述べられない。

全般に石質は、乳白色の硬質砂岩が多い。

（中村公宣）

５．古銭（第19図、第20図）

本調査で出土した古銭は、銭名のわかるもの93枚、判読のできないもの・重なっているもの26枚、無名のもの163枚で、総数は282枚である。なお９枚の鉄銭を除いて、すべて銅銭である。

出土場所内訳は、壕跡が176枚、建物跡が74枚、表採が32枚となっている。

壕跡では、Ⅰ層で31枚、Ⅱ層で34枚、Ⅲ層で99枚、表採で12枚が出土している。

建物跡では、表土(耕作土)からが最も多く出土しているが、17K11区の柱穴覆土から11枚、18L８区の柱穴覆土から１枚、17K16区の柱穴覆土から１枚、19L13区の柱穴覆土から１枚、21J21区の柱穴覆土から３枚、18K区の溝状遺構の覆土から１枚、21L20区の竪穴遺構の覆土から２枚等、遺構内から出土しているものもある。

銭貨名の内訳は、一覧表(40頁)の通りである。

中国銭は唐・宋・明、朝鮮、日本銭は江戸の各時代のものが出土した。

皇宋元宝の背に三とあるのは、南宋・宝祐3(1255)年鋳造のものである。(第19図８)

寛永通宝には、背に文とある寛文８(1668)年に鋳造したもの２枚(第20図17ａ、ｂ)と、背に元とある寛保年間（1741～1744）に大阪高津新地で鋳造したもの３枚(第20図17ｃ、ｂ)と、他に元文４(1739)年以降に鋳られた鉄銭が1枚出土している。

（中村公宣）

６．骨角製品（第20図～第21図）

本調査において骨角製品はすべて壕跡部魚貝層よりの出土であり、内訳としては大半は中柄等の製品で若干装飾品等がみられる。尚、肉眼観察によると素材は鹿角、鹿骨、海獣骨、その他と思われる。順次詳細を記していく。

第20図

１は身中央部に小孔が１つある。ほぼ完形である。２は小孔が２つある。下半部を欠損している。

1、2とも骨針と思われる。3は全面に荒い整形痕がみられ、上部がやや細くなり弯曲する。長さ8.3cm程である。性格、用途は不明。4は断面三角形を呈する。半欠しているが、中央に直径約2mmの小孔がみられる。全面を入念に研磨している。装飾品と思われる。5は髪の飾りとして挿す竪櫛と思われる。上部に小孔がある。表面は研磨されている。極めて薄い。6は両先端断面が偏平でやや細くなる。全体によく研磨されている。中央部に直径4mmの小孔がある。内側よりの穿孔と思われる。中央部断面はほぼ方形であり、やや丸味を帯びる。完形品である。性格、用途は不明。

第21図

1～4は鏃と思われる。1は柄部が若干欠損している。尖頭部は入念な加工が施され、一条の稜を中央に形成する。2も殆んど同形である。1、2とも尖頭部断面形が半円状となる。逆刺がほぼ直角に張り出す。3は尖頭部断面が菱形を呈し、両面とも入念な加工が施され、一条の稜を形成する。4は尖頭部を欠損する。逆刺が2対みられ、両方ともえぐるように作出される。体部の断面形は半円状となる。5～19は中柄と思われる。5～9は先端部断面形が半円状となり基部に二次加工が施されている。5はほぼ完形であり、基部は鋭く尖っている。6、7ともに小型であり、基部を欠損している。8は完形品である。9は体部断面形がやや偏平となる。10～17、19は先端部断面形が前出と同じく半円状となるが、基部に二次加工が施されていない。10は先端部、基部を欠損している。12は先端部に鋭さはない。17は先端部、基部とも欠損している。19は空洞の骨にもう1本の骨をさしこみ、先端部を斜めに削平したものである。18は先端部断面形が円状になるものである。基部、先端部を欠損している。20は形態、大きさ等より銛先か箭、あるいは槍の可能性がある。　（斉藤邦典）

7．その他（木製品、漆器、自然遺物）

陶磁器、鉄・銅製品、石製品、古銭以外の主な出土遺物として、木製品、漆器、自然遺物（動・植物遺存体）がある。これらは、壕跡部（魚貝層）より出土しており、漆器以外のものは極めて大量に存在し、現在整理分析中である。よって詳しい鑑定を待って報告したいと考えている。

第16図50の木製品は、片面上半部に模様が刻してあるもので中央部の突出した部分の欠損状態から想定すると、同形態のものが相対して存在すると思われるが、用途等は不明。

漆器と思われるものは、皮部のみの小片である。

（藤田　登）

おわりに

本年度の発掘調査は、当初、館神八幡宮跡とその後方に位置する空壕、溝等の調査に主体を置いていたが、建物跡部の確認調査において大規模な遺構が検出される等、予想以上の成果が得られた為、調査の一部変更を余儀なくされ、館神八幡宮跡の調査は、次期に繰越した。

壕跡は、昨年度の調査から予想された通りの複雑な形成が部分的に確認された。空壕Aは、西側の沢下まで調査した所、沢に近接しながらも北側に延る傾向にある。空壕Bは、Cと重複し接続する。Bに切られている空壕Cは、ほぼ南北に屈折しながら延る全長約60mを有するものであった。

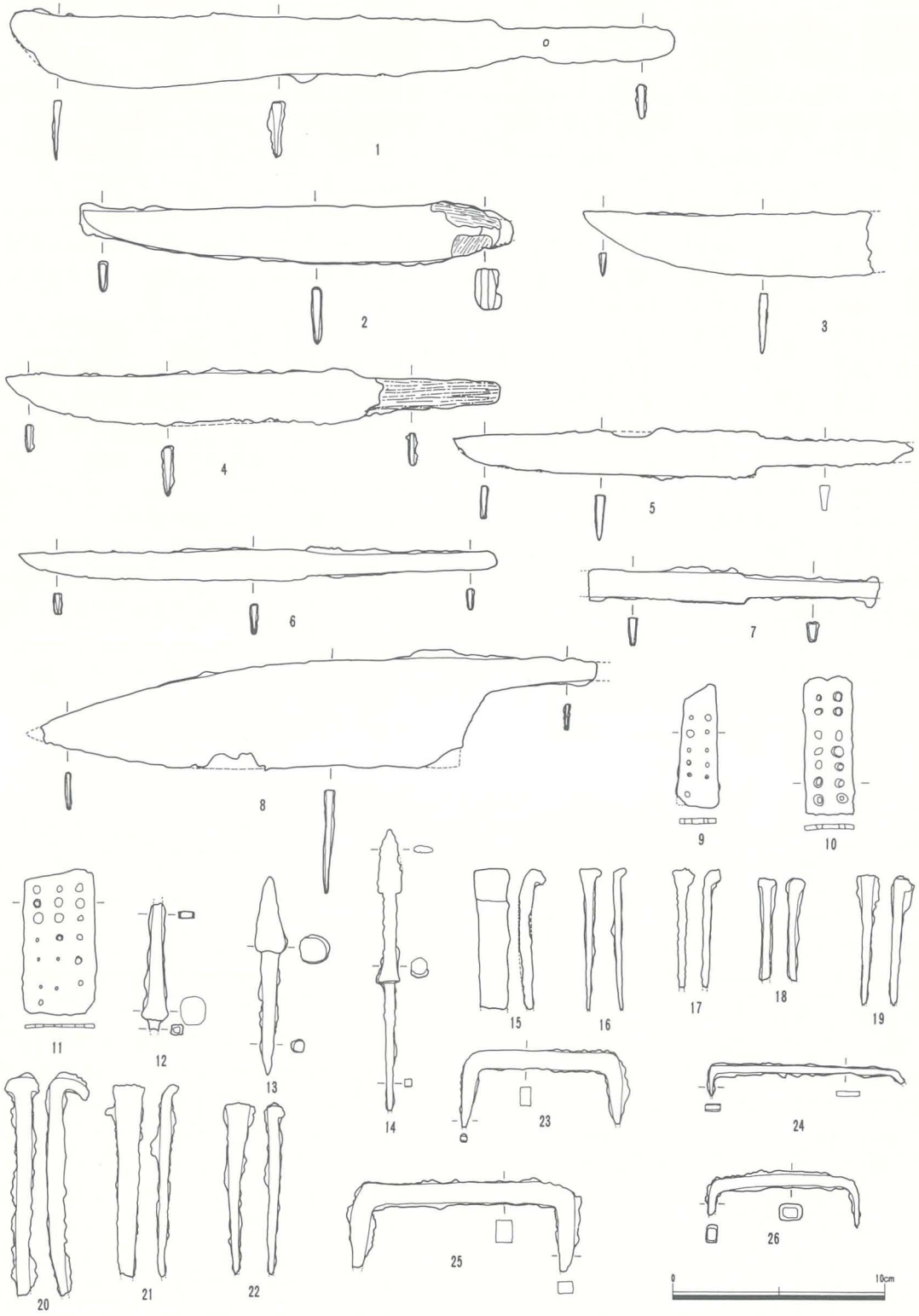
遊歩道（旧御代参道路）より東側部については今後の調査でさらに明らかにしたい。又、遊歩道に沿って存在する土堤の調査では、その下に白色火山灰（1741年）を載せる台形を呈す旧土堤が確認された。しかしこれは空壕構築時のものではない。

建物跡においては全面発掘を待って全貌を明らかにしたい。

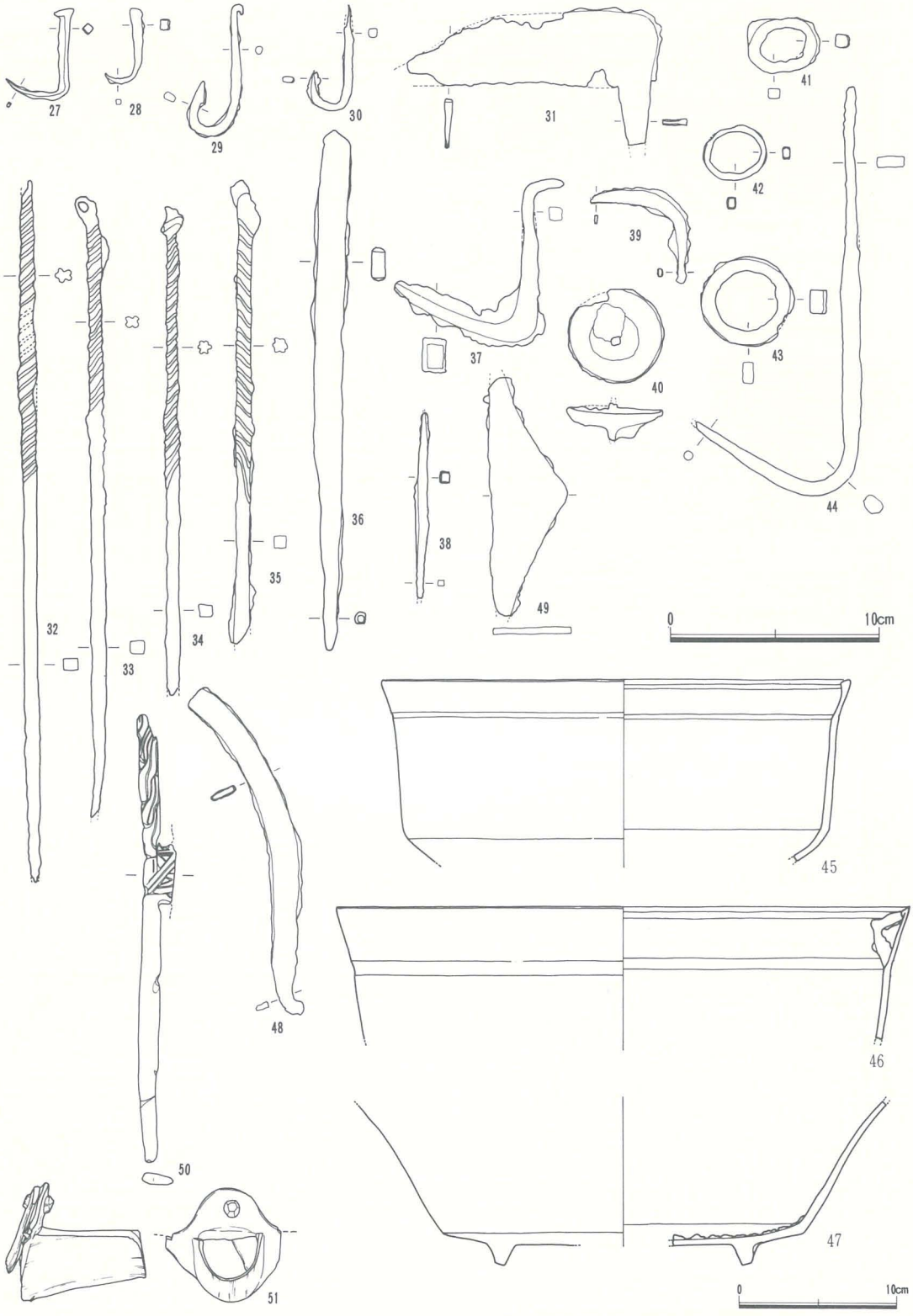
遺物は、多数の資料が得られ現在整理分析をすすめている。陶磁器においてはある程度の分析結果を得たが、さらに充分な観察を行い明らかな時代検証が必要視される。製品は16世紀が主体をなし、舶載陶磁器は明代のものが多い。

鉄製品、銅製品は、武具的なものと建築具的なものが生活具的なものを上まわって出土しており、骨角製品が多量に出土した例と併せ、本館の特徴を意味するものと思われる。

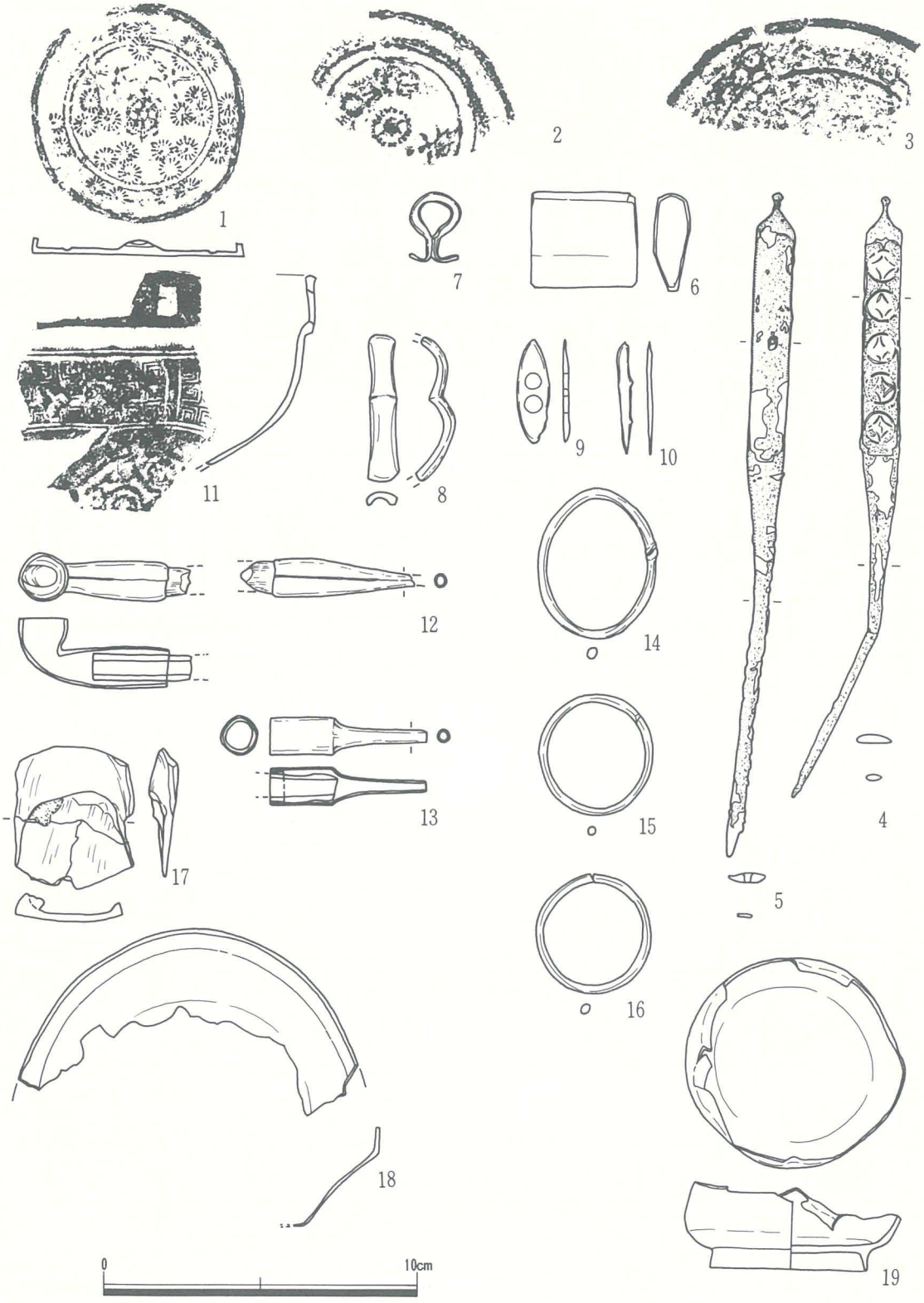
以上の様に大まかな考察より述べられず、今後に重要な問題点（各遺構の年代、遺物の細分析及び時代検証）を投じている。　（藤田　登）



第15図　鉄製品

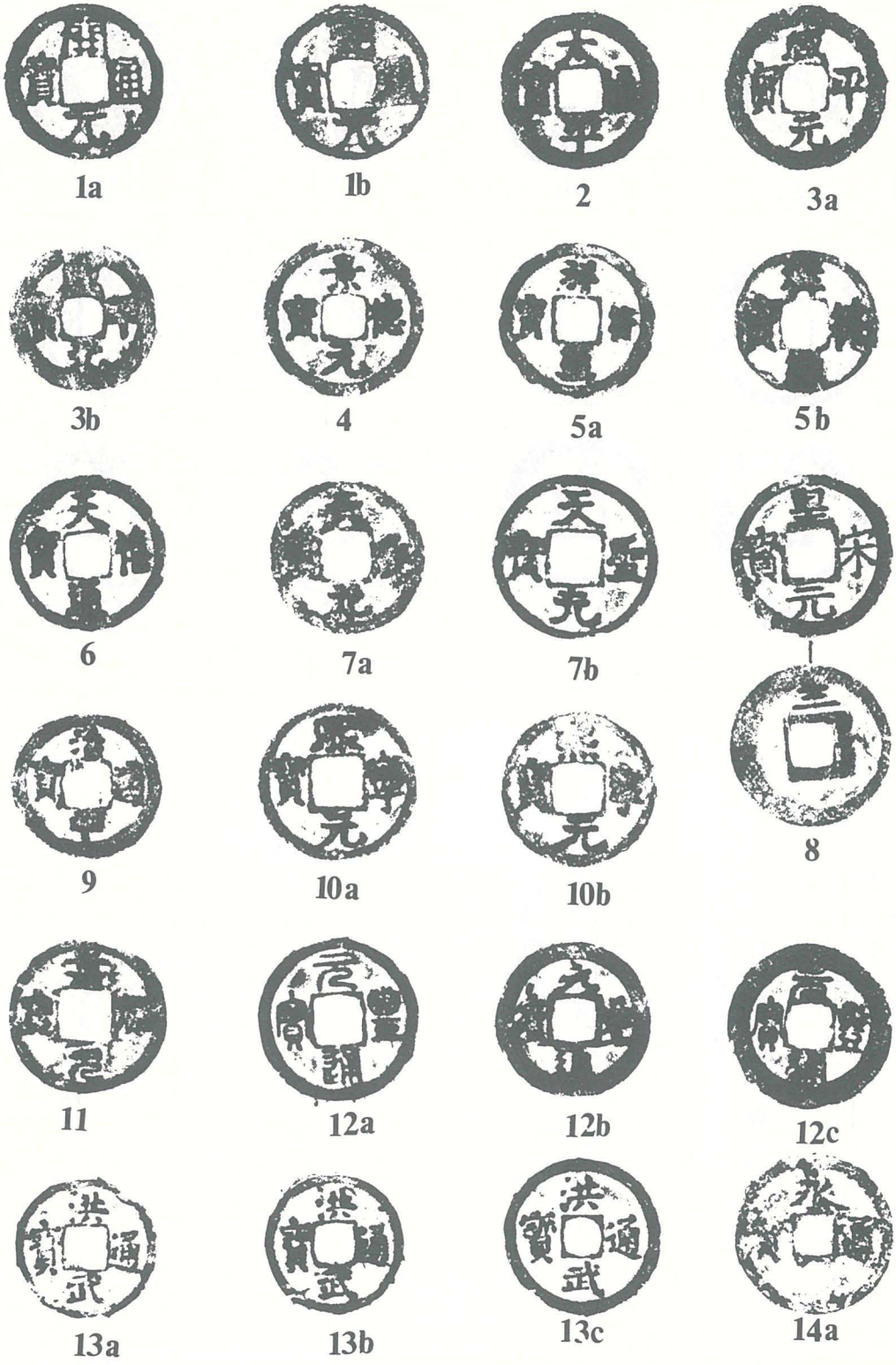


第16図　鉄製品，木製品，銅製品

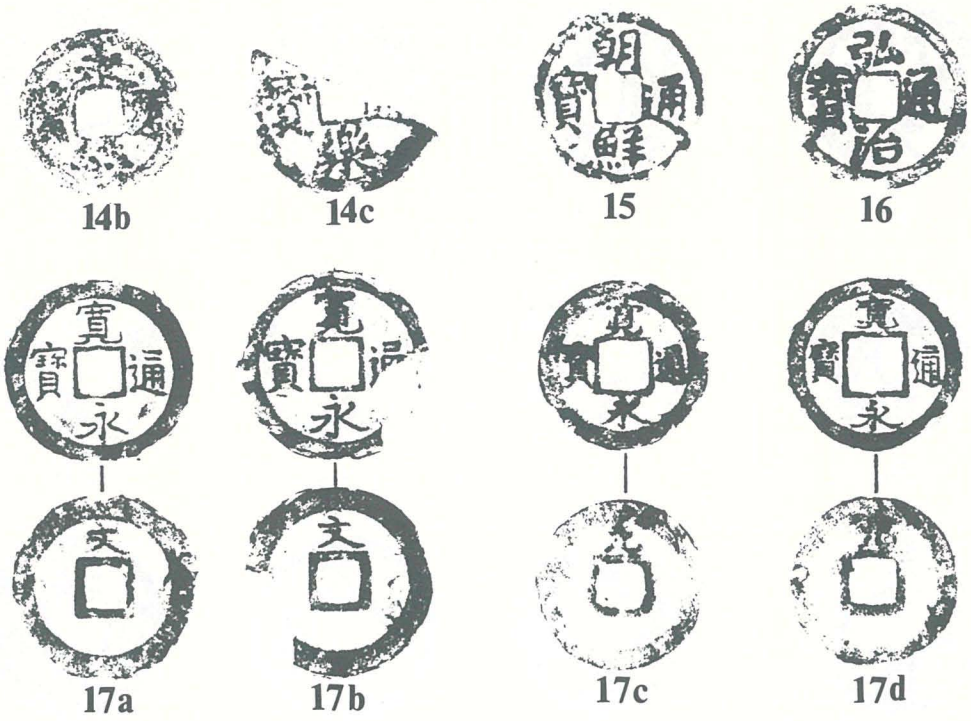


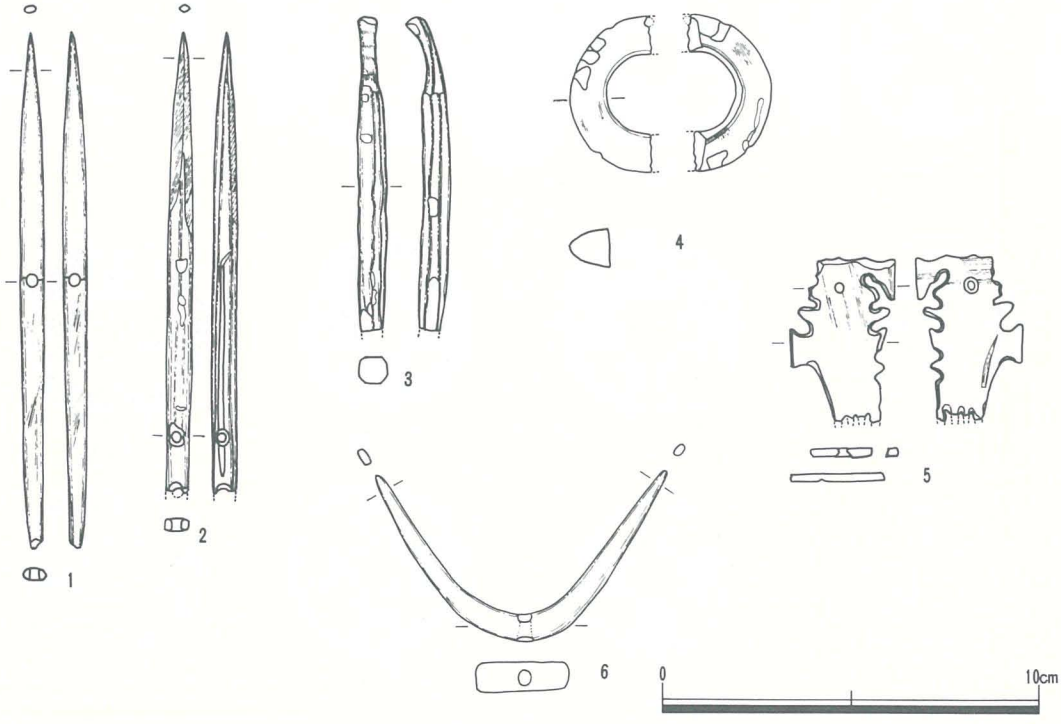
第17図　銅製品

第18図　石製品

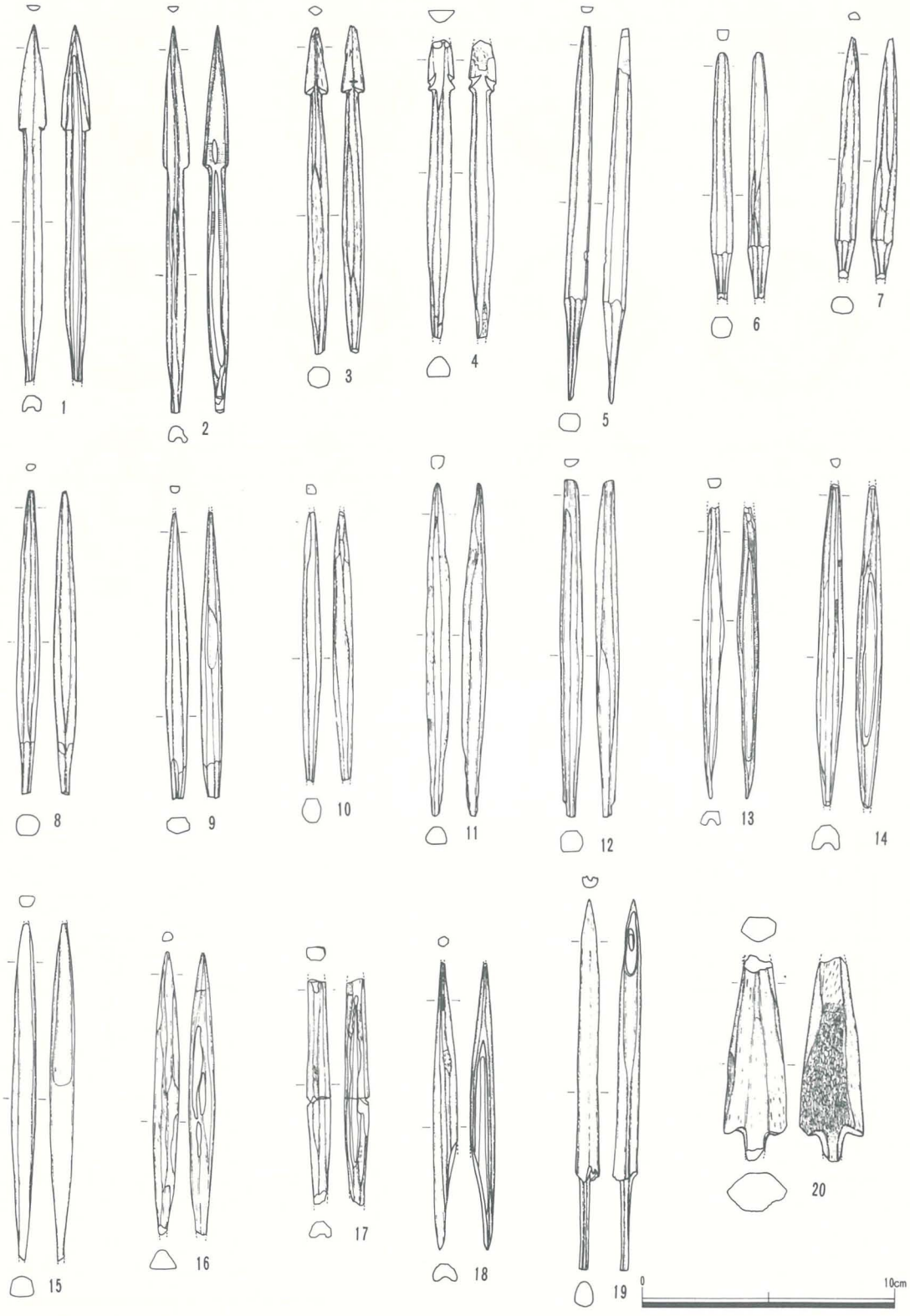

1a
1b
2
3a
3b
4
5a
5b
6
7a
7b
8
9
10a
10b
11
12a
12b
12c
13a
13b
13c
14a

第19図　古銭





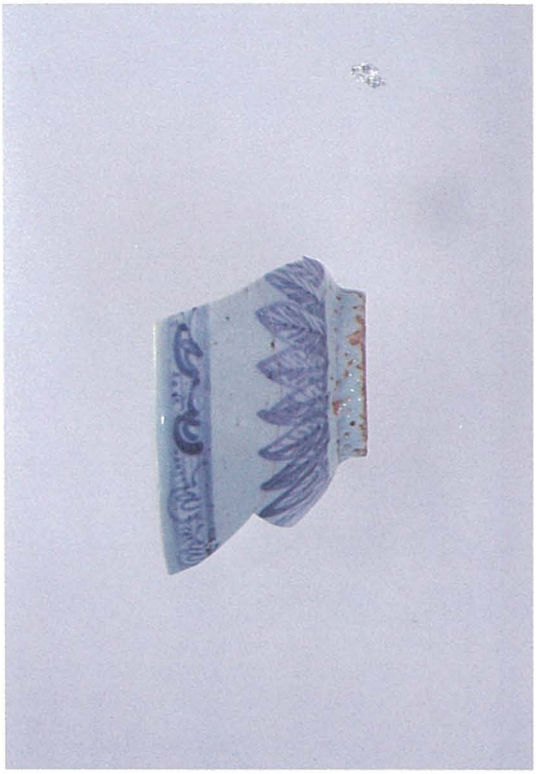
第20図　古銭，骨角製品



第21図　骨角製品

遺物番号	出土地区	銭貨名	初鋳年	時代	備考
Z1-1	27K 2	開元通宝	621	唐	1a
Z1-1	27L10	開元通宝	621	唐	完形品 1b
Z10-1	26L25	太平通宝	976	北宋	完形品 2
Z25-3	27K 2	咸平元宝	998	北宋	完形品 3a
Z11	26L25	咸平元宝	998	北宋	3b
Z14-1	表 採	景徳元宝	1004	北宋	完形品 4
Z9-2	26L24	祥符通宝	1008	北宋	完形品 5a
Z11-3	27K 2	祥符通宝	1008	北宋	完形品 5b
Z11-2	27K 2	天禧通宝	1017	北宋	6
Z16-1	27K 2	天聖元宝	1023	北宋	完形品 7a
Z17	表 採	天聖元宝	1023	北宋	完形品 7b
Z4-1	18L12	嘉祐元宝	1056	北宋	11
Z5-2	27K 4	治平通宝	1064	北宋	完形品 9
Z13-1	27K 2	熙寧元宝	1068	北宋	10a
Z5-1	26L25	熙寧元宝	1068	北宋	完形品 10b
Z3-2	21L20	元豊通宝	1078	北宋	完形品 12a
Z2	17K11	元豊通宝	1078	北宋	完形品 12b
Z6	27L10	元豊通宝	1078	北宋	完形品 12c
Z15	26K14	皇宋元宝	1253	南宋	背三、完形品 8
Z8-1	26L24	洪武通宝	1367	明	完形品 13a
Z12	26K13	洪武通宝	1367	明	13b
Z6	27K 2	洪武通宝	1367	明	完形品 13c
Z8-1	17K11	永楽通宝	1408	明	磨滅が著しい 14a
Z13-2	27K 2	永楽通宝	1408	明	磨滅が著しい 14b
Z7	27L 5	○楽○宝	1408	明	2枚重なっている 14c
Z11-1	27K 2	朝鮮通宝	1423	朝鮮	完形品 15
Z5	18K	弘治通宝	1488	明	16
Z2	25L12	寛永通宝	1636	日本	背文 17a
Z6	表 採	寛永通宝	1636	日本	背文 17b
Z2	26J 1	寛永通宝	1636	日本	背元、完形品 17c
Z1	26J 1	寛永通宝	1636	日本	背元、完形品 17d
Z13	表 採	開元通宝	621	唐	
Z8-2	17K24	開元通宝	621	唐	完形品
Z6	17K11	開元通宝	621	唐	
Z14-1	27K 4	太平通宝	976	北宋	磨滅が著しい
Z4-1	26K23	咸平元宝	998	北宋	完形品
Z2-1	21L20	景徳元宝	1004	北宋	3枚重なっている
Z13-3	27K 2	景徳元宝	1004	北宋	
Z11-5	27K 2	祥符通宝	1008	北宋	磨滅が著しい
Z15-1	27K 4	天禧通宝	1017	北宋	完形品
Z10-1	26K 3	皇宋通宝	1039	北宋	
Z11-4	27K 2	皇宋通宝	1039	北宋	完形品
Z9-2	27K 2	皇宋通宝	1039	北宋	完形品
Z10-2	26L25	治平元宝	1064	北宋	
Z6-1	26K23	元豊通宝	1078	北宋	完形品
Z7	27K12	元○通宝	1078	北宋	
Z4-1	27K 4	元豊通宝	1078	北宋	
Z8-3	17K11	元○通宝	1078	北宋	
Z7-1	26K17	元豊通宝	1078	北宋	磨滅が著しい

遺物番号	出土地区	銭貨名	初鋳年	時代	備考
Z11-6	27K 2	元豊通宝	1078	北宋	2枚重なっている
Z5	27K 4	元祐通宝	1086	北宋	
Z3-1	27L	政○通○	1111	北宋	
Z13-4	27K 2	洪武通宝	1367	明	完形品
Z9-1	26L24	洪武通宝	1367	明	
Z5-2	26K 2	洪武通宝	1367	明	
Z22-1	27K15	洪武通宝	1367	明	
Z5-1	26K 2	洪武通宝	1367	明	
Z3-1	21L20	洪武通宝	1367	明	
Z9-1	27K 2	洪武通宝	1367	明	完形品
Z1-1	26K22	洪武通宝	1367	明	完形品
Z25-2	27K 2	洪武通宝	1367	明	
Z3-1	27K 2	○武○○	1367	明	
Z25-1	27K 2	○武○宝	1367	明	
Z5-2	26K 2	洪武通宝	1367	明	
Z8-4	17K11	洪武通宝	1367	明	磨滅が著しい
Z8-5	17K11	洪武通宝	1367	明	
Z6-1	18L 8	洪○○○	1367	明	
Z9	表 採	永楽通宝	1408	明	磨滅が著しい
Z7	表 採	寛永通宝	1636	日本	
Z1	17L17	寛永通宝	1636	日本	
Z19	27K11	寛永通宝	1636	日本	背元
Z13	26L	寛永通宝	1636	日本	完形品
Z8	表 採	寛永通宝	1636	日本	完形品
Z1	24K	寛永通宝	1636	日本	完形品
Z3	26J 11	寛永通宝	1636	日本	完形品
Z3	17L13	寛永通宝	1636	日本	
Z5-2	表 採	寛永通宝	1636	日本	完形品
Z21	表 採	寛永通宝	1636	日本	完形品
Z4	表 採	寛永通宝	1636	日本	完形品
Z10	表 採	寛永通宝	1636	日本	完形品
Z2	表 採	寛永通宝	1636	日本	完形品
Z1	25L12	寛永通宝	1636	日本	
Z13	26K 4	寛永通宝	1636	日本	完形品
Z1-1	18L12	寛永通宝	1636	日本	
Z2	17L10	寛永通宝	1636	日本	
Z15	表 採	寛永通宝	1636	日本	完形品
Z2	18L 7	寛永通宝	1636	日本	磨滅が著しい
Z20	表 採	寛永通宝	1636	日本	
Z5	表 採	寛永通宝	1636	日本	
Z2	27L 5	寛永通宝	1636	日本	
Z1	25K19	寛永通宝	1636	日本	磨滅が著しい
Z16	26K14	寛永通宝	1636	日本	鉄銭、完形品
Z9-1	表 採	寛永通宝	1636	日本	完形品



ＰＬ１　陶磁器

ＰＬ２ 陶磁器

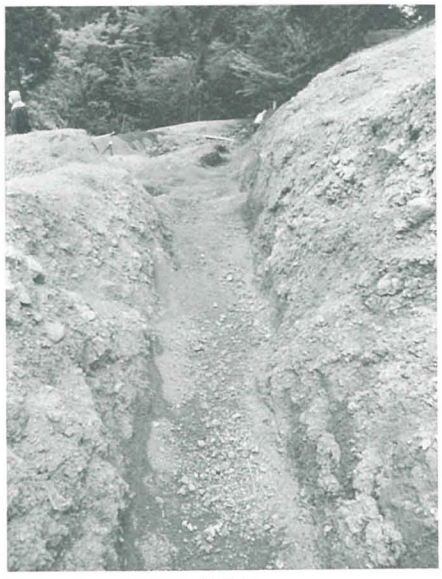
ＰＬ３ 航空写真

壕跡部遠景

壕跡部発掘区

壕跡部作業風景 1

壕跡部作業風景 2



空壕C

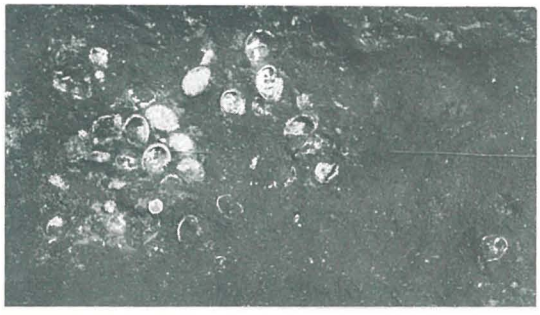
空壕Cと大規模な落込み

空壕セクション(B・C)

魚貝層

空壕B

空壕C



貝殻出土状況

鏡, 刀子, 鋌出土状況

刀子出土状況

刀子, 古銭出土状況

建物跡部 1 (21J)

建物跡部 2 (21J, 柱穴内の礫)

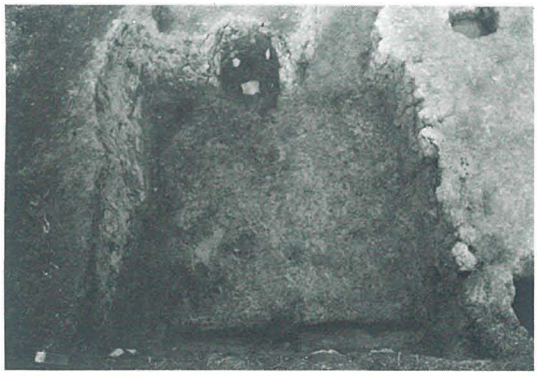
建物跡部 3 (27L・K, 作業風景)

建物跡部 5 (17, 18K, 遠景)

建物跡部 4 (20L, 溝遺構セクション)

建物跡部 6 (18K, 遠景)

竪穴遺構全景１（P1）



竪穴遺構全景２（P4）

竪穴遺構全景３（P2）

柱材出土状況１（17K）

竪穴遺構セクション（P5）

柱材出土状況２（21L）

土堤部セクション

集石状況（17K）

空壕Ｃ全景

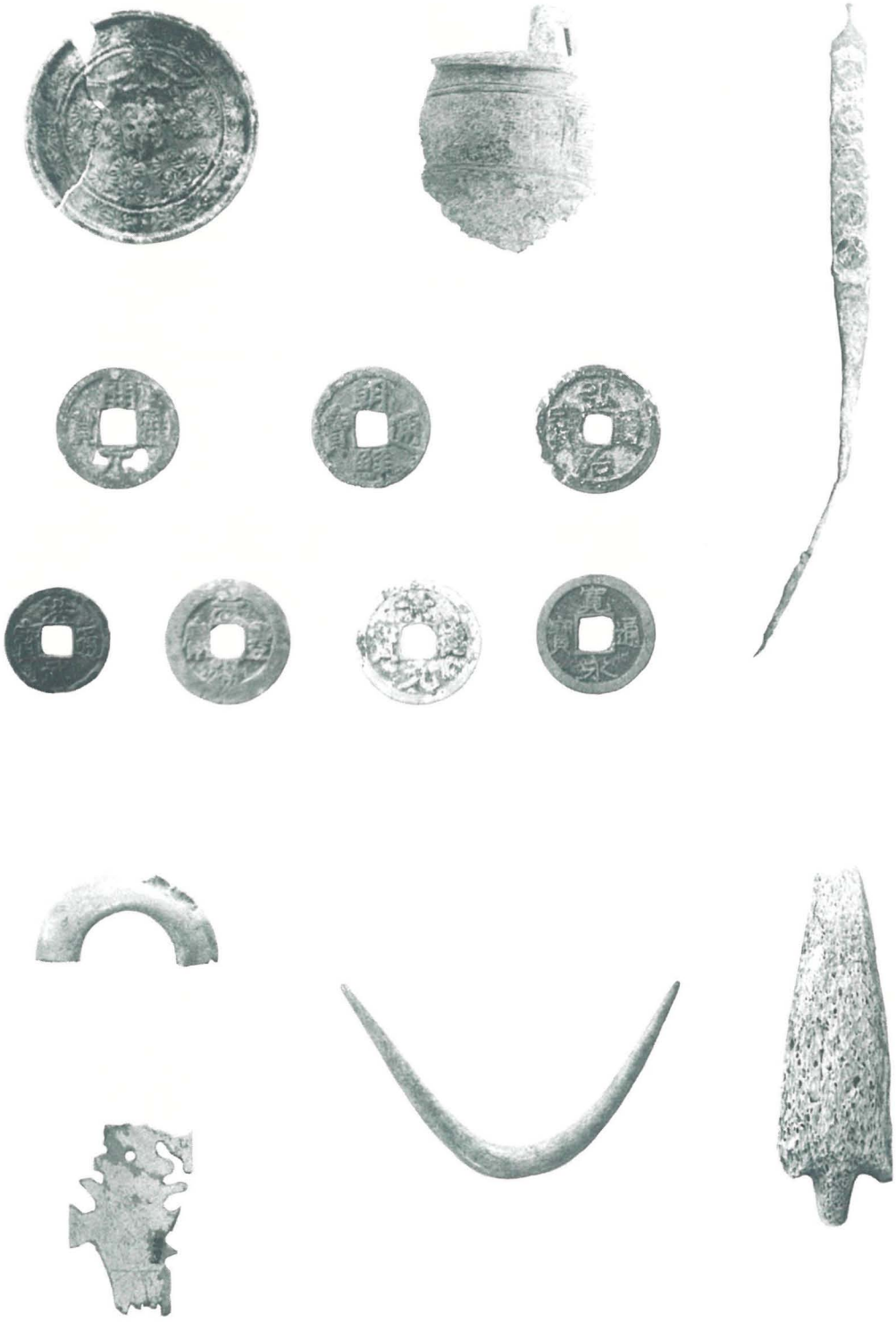
竪穴遺構全景

魚貝土層

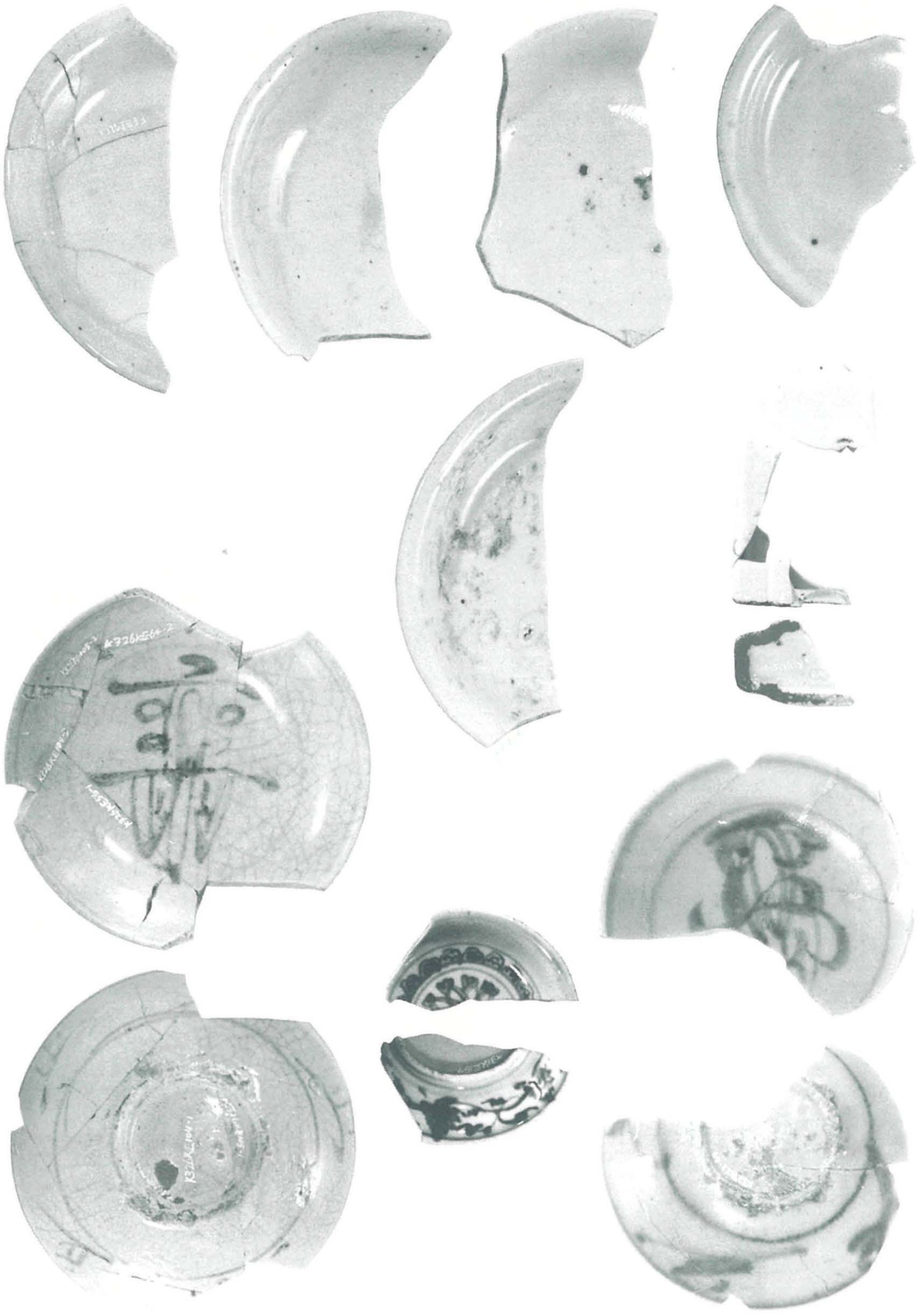
空壕Ｃセクション

建物跡全景１

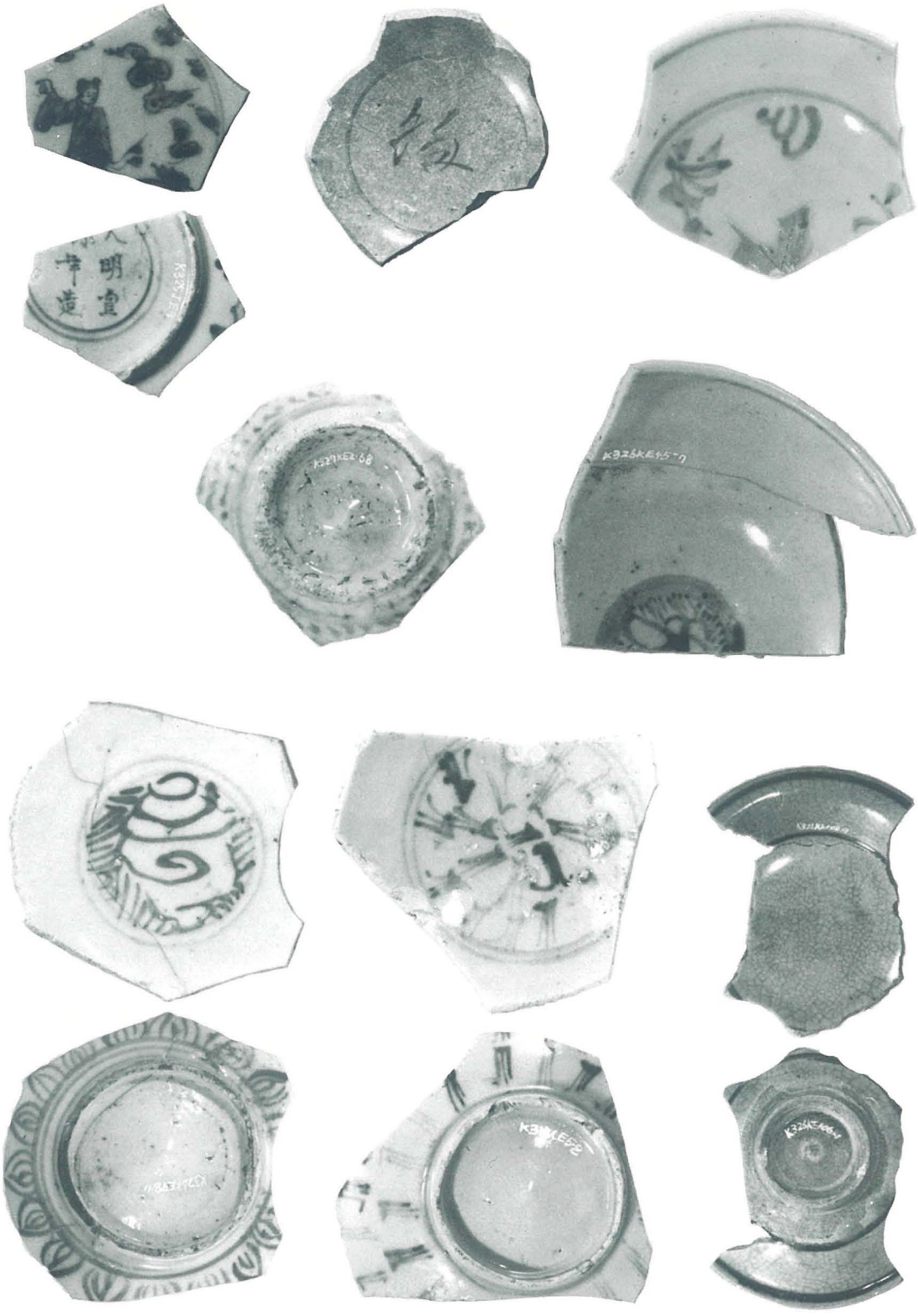
建物跡全景２



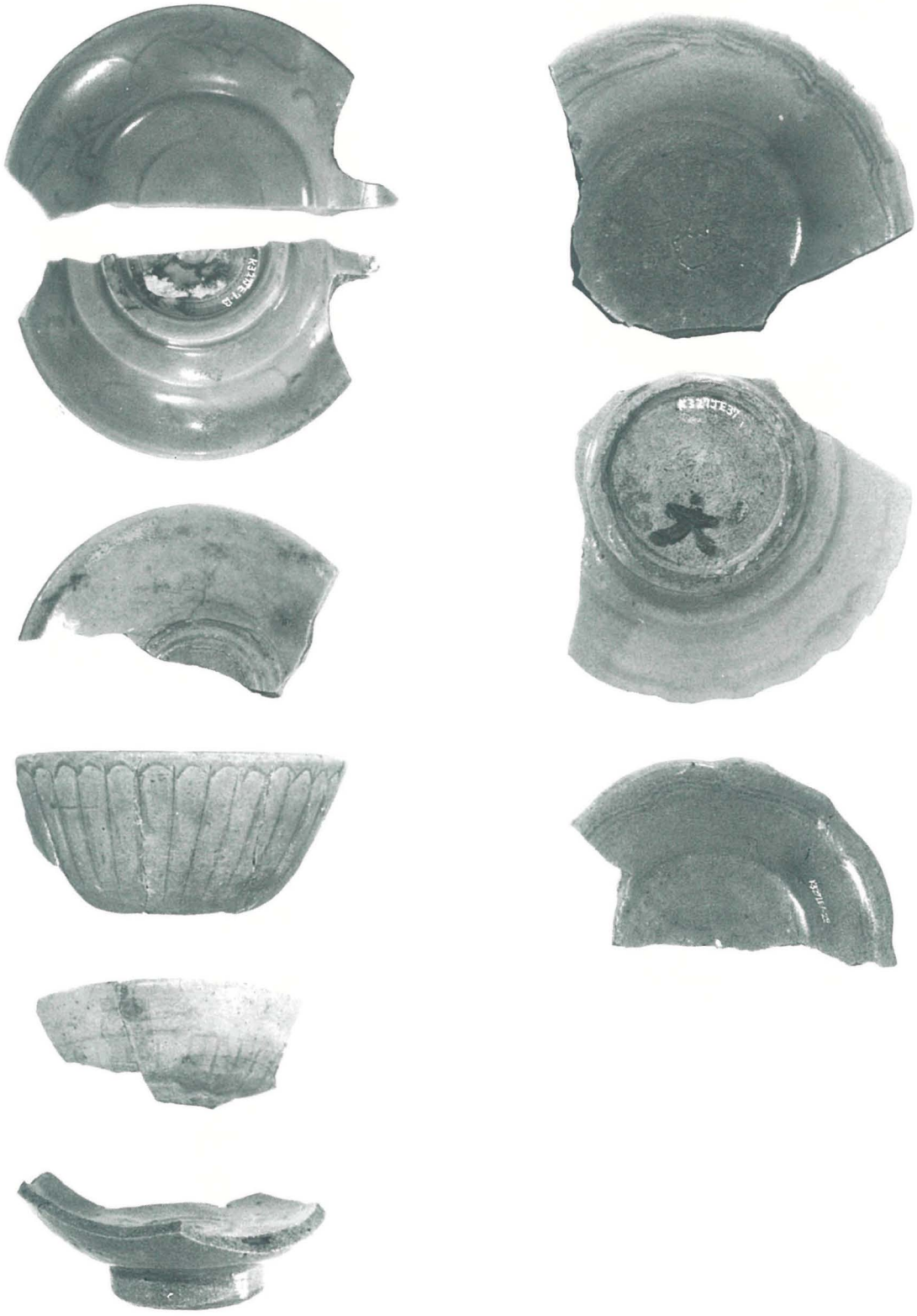
ＰＬ９　銅製品，古銭，骨角製品



ＰＬ10　舶載陶磁器(白磁，染付)

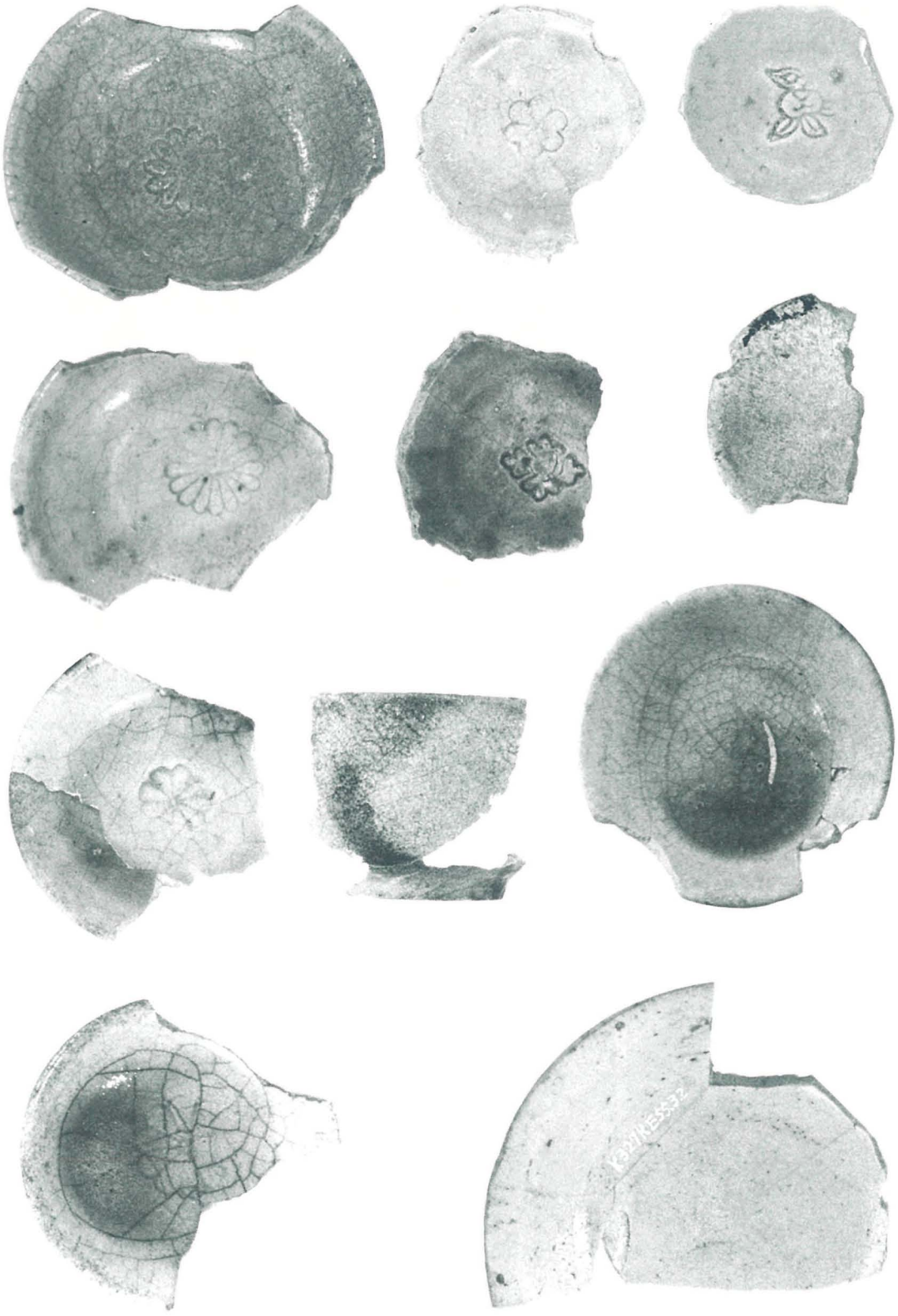


P L 11　舶載陶磁器(染付)

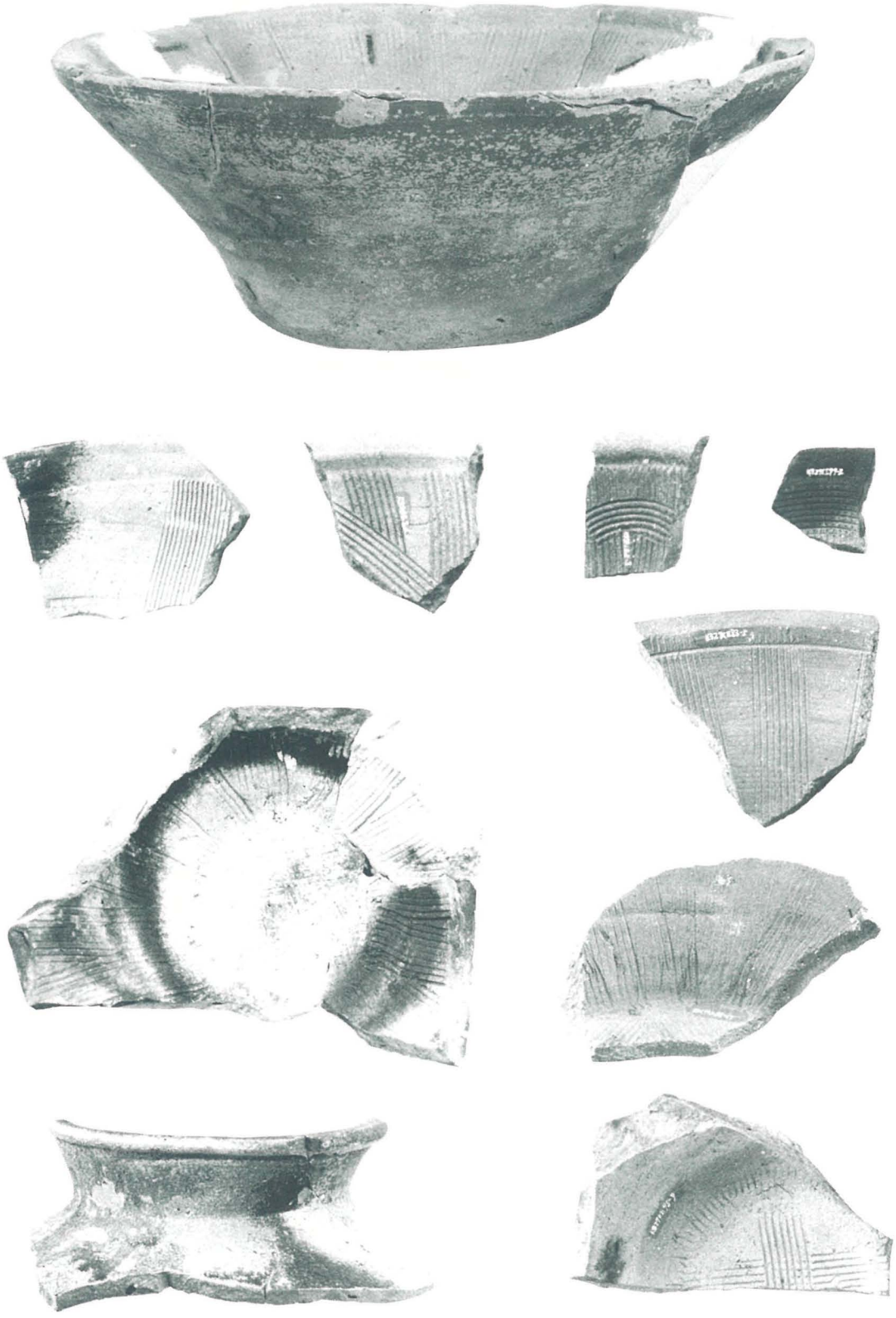


PL12　舶載陶磁器（青磁）

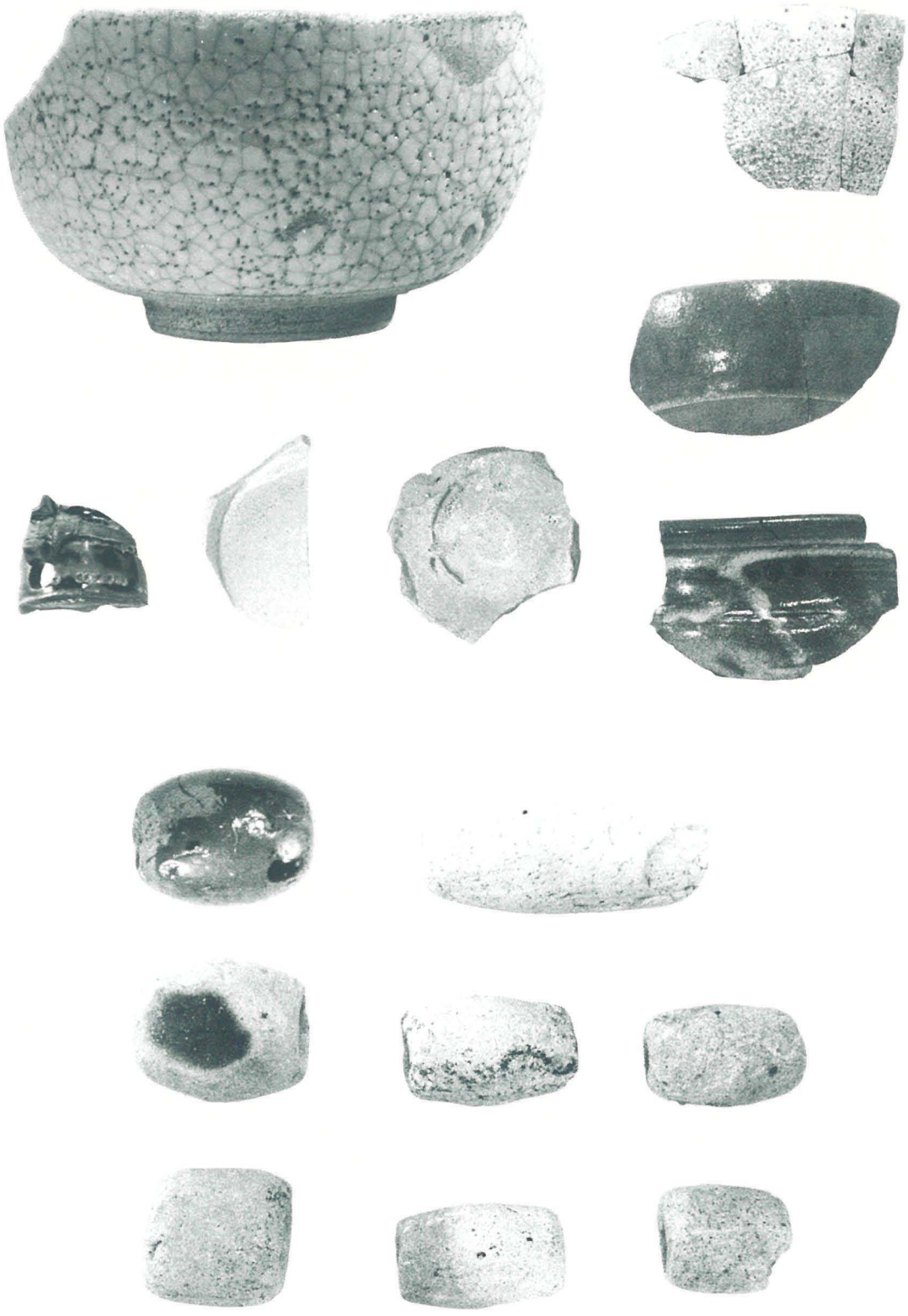
ＰＬ13　舶載陶磁器と国産陶磁器（天目，唐津，瀬戸，美濃）



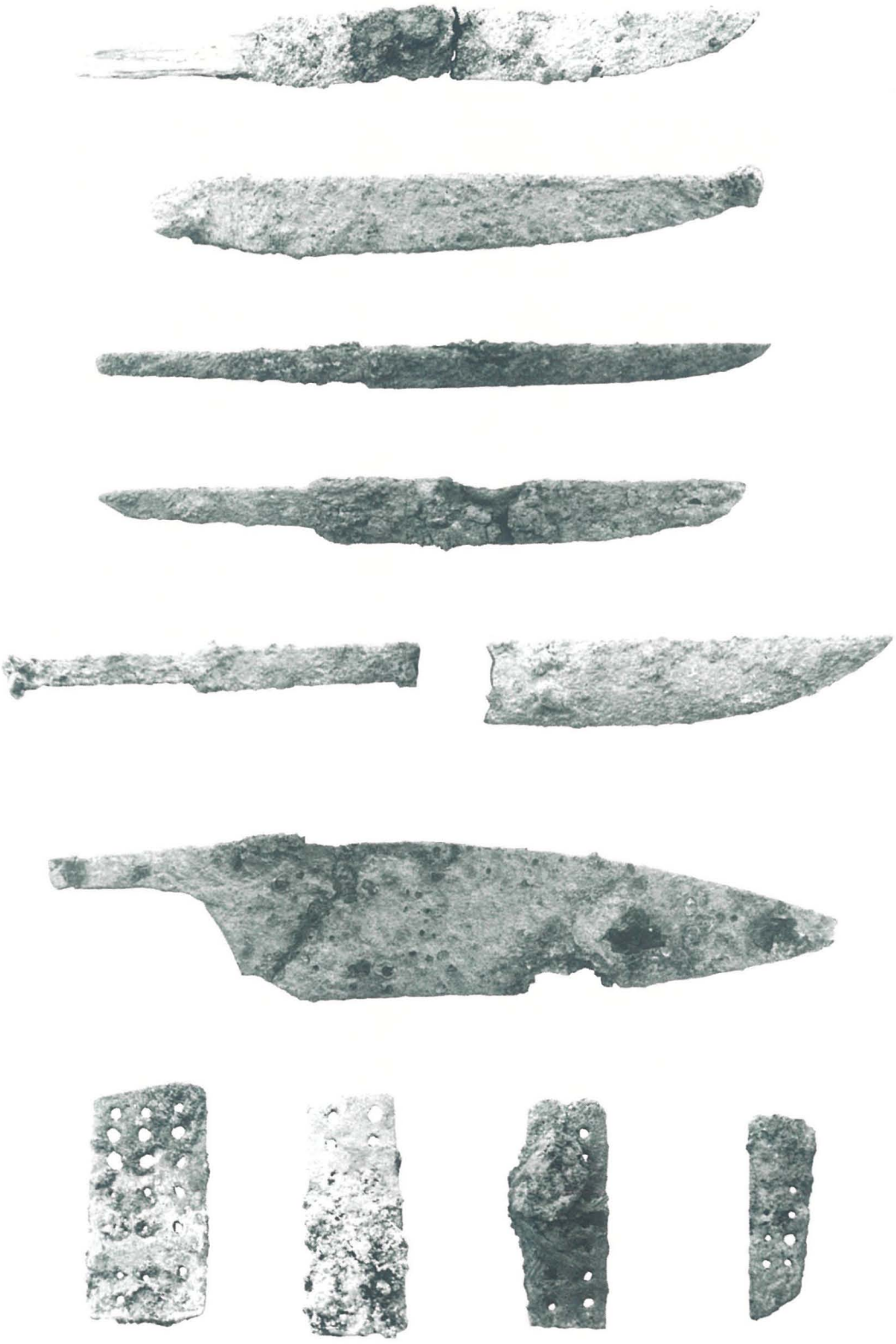
PL14　国産陶磁器(美濃,瀬戸,唐津)



ＰＬ15　国産陶磁器（摺鉢，壺）



ＰＬ16　国産陶磁器(志野,沈子)



ＰＬ17　鉄製品

ＰＬ18　鉄製品

ＰＬ19　鉄製品

ＰＬ20　銅製品

PL21　古銭

ＰＬ22　石製品

ＰＬ23　骨角製品

ＰＬ24　骨角製品，木製品

史跡　上之国勝山館跡　II

—昭和55年度発掘調査環境整備事業概報—

発　行　　上ノ国町教育委員会

昭和56年 3 月31日　発　　行
昭和58年 3 月31日　増刷発行

印刷所　（協）高速印刷センター

史跡　上之国勝山館跡地形図